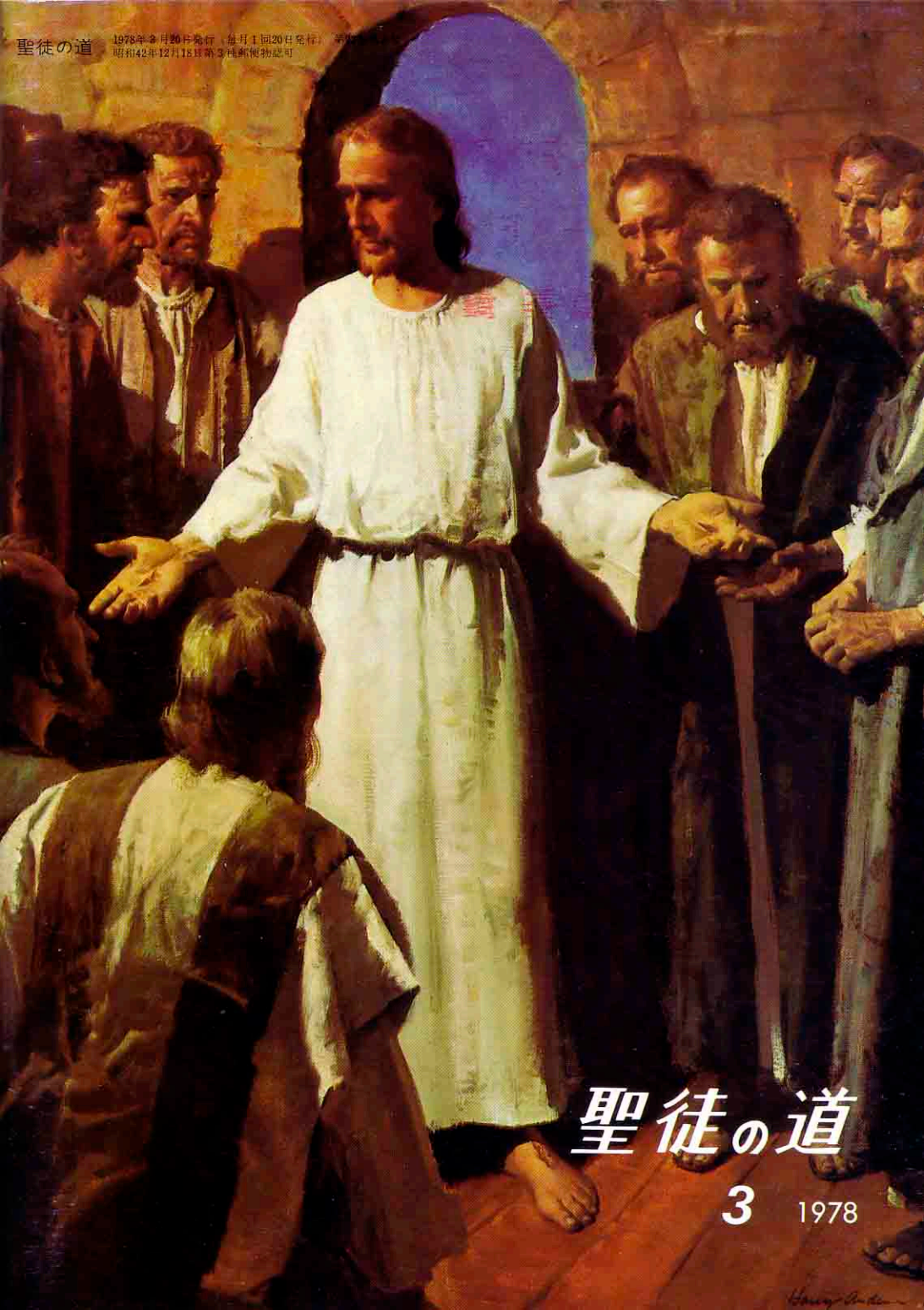
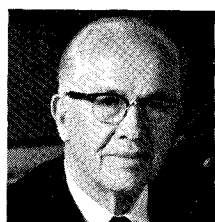




聖徒の道

3 1978

Harry Anderson



末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
デルバート・L・ステイブレー
リグランド・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー
デビッド・B・ヘイト

顧問

マリオン・D・ハンクス
ロバート・D・ヘイルズ
ディーン・L・ラーセン
リチャード・G・スコット

教会誌編集主幹

ディーン・L・ラーセン

国際機関誌

ラリー・ヒラー (編集主幹)
キャロル・ラーセン (編集副主幹)
ロジャー・ギリング (デザイナー)

も く じ

敬虔	マリオン・G・ロムニー	1
幼な子の救い	ブルース・R・マッコンキー	3
教会管理人の立場から	ローラ・J・エイシー	11
学習の種	セオ・E・マキーン	16
間接経験から得られるもの	フィリップ・C・スミス	18
ローカル・ニュース		19
「世界で一番の幸福者」		21
指でも見えるわ	エレイン・C・スミス	22
ぼくの友だち、イエスさま	ブライアン・ウッドフォード	24
おもちゃばこ		28
それだから、あなたがたも 完全な者となりなさい	ブレンダ・ハント	32
質疑応答	アーデス・G・カップ	38
庭の花のブーケ	ジャック・ウェイランド	40
頭では知らないことを心が 教えてくれる時	ハロルド・B・リー	46

聖徒の道 3月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5-8-10
印刷所 株式会社 精興社
配 送 東京ディストリビューション・センター
東京都世田谷区上用賀4-9-19
定 価 年間予約1,700円 1部150円
海外予約1,700円

INTERNATIONAL MAGAZINE Printed in Japan

「聖徒の道」

八木沼 修一 (翻訳部長)

郵便振替口座番号 東京0-41512

口座名 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京ディストリビューション・センター



敬 虔

第二副管長 マリオン・G・ロムニー

敬虔さは、真実の宗教の真髄である。それは誠実さが基礎となる。神が私たちの崇敬する対象であるならば、私たちは、神を礼拝し、神に関することをことごとく畏怖の念をもって取り扱う。そのような認識と態度がないのは、不敬のしるしである。

神について多くのことを知っている私たち末日聖徒は、世界で最も敬虔な民でなければならないし、現にそうであると私は信じている。

秩序も敬虔さの一部である。清潔も同様である。身体も、衣服も、言葉遣いも、行ないも、そして思いも清くなければならない。礼儀や他人に対する敬意、あるいはそれに類する諸徳も、やはり敬虔さの一部である。神に對して真に敬虔な思いを抱く人は、普通、神

のみこころを行なうものである。

ほかの諸徳は言うに及ばず、イエスは、敬虔さという点でも、最大の模範を示された。イエスが人々に祈りの方法を教えられた時、天父にどれ程敬虔な思いを抱いておられたか見てみよう。

「天にいますわれらの父よ、

御名があがめられますように。

御国がきますように。

みこころが天に行われるとおり、

地にも行われますように。

わたしたちの日ごとの食物を、

きょうもお与えください。

わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をもおゆるしください。

わたしたちを試みに会わせないで、
悪しき者からお救いください。

王国と力と栄光は永遠にあなたのものだからです。アーメン。」(欽定訳マタイ6:9-13)

イエスが天父のみこころに従うことにどれ程心を砕いておられたか、注目して欲しい。不信仰なユダヤ人に向かい、御自分こそ正に神の御子であると一心に説かれた時、主は次のように言われた。「わたしは自分からは何もせず、ただ父が教えて下さったままを話していた……わたしは、いつも神のみこころにかなうことをしている……。」(ヨハネ8:28, 29)

御父の宮居である神殿に対して抱いている敬虔さのゆえに、イエスは2度にわたって宮清めをされた。

また、ゲッセマネの園で、あの苦痛のゆえに「父よ、みこころならば、どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください」と叫ばれたのは真実である。しかしなお、その苦悩のさ中でさえ、主は、御自分の苦痛を取り去られることよりも、むしろ御父のみこころを行なうことの方に深く心を傾けておられたのである。主は直後に次のように言われた。「しかし、わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください。」(ルカ22:42)

記録上、イエスの最初の言葉は「どうしてお捜しになったのですか。わたしが自分の父の家にいるはずのことを、ご存じなかったのですか」(ルカ2:49)という言葉である。また最後の言葉は、十字架上からの、「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」(ルカ23:46)という言葉であった。このように、救い主の全生涯は、絶えず御父に対する敬虔さを表わすものであった。

主に従う賢明で忠実な末日聖徒は、敬虔な者となることになんの困難も感じない。その全生涯を、福音を理解し福音に従って生活することに捧げ、聖きみたまによって鍛えられる。そしてその結果、どんな場面でも、なん

の抵抗もなく敬虔に振る舞うことができるようになるのである。

子供たちは、敬虔さを生み出す概念を持ち合わせて生まれてくるわけではない。またこのような概念が子供たちの心の中で直ちに育成されるものでもない。中には例外的に、特別の訓練を受けなくても敬虔になることのできる子供もいる。しかし、大抵の子供は、訓練の度合いに応じて敬虔になるものである。もし子供たちが幼い頃から不敬な行為を示すとしたら、それは適切な訓練が施されていないからである。敬虔な者となるための訓練は、家庭でも学校でも教会でも行なわなければならないことは無論のことである。親と教師はこのことを心に留めて、この重大な責任を果たさなければならない。この責任は、ないがしろにしておいて平然としていられるような安易な責任ではない。

究極の目標は、一人一人の心の中に、誠実さや知識、信仰、証、自己鍛練の気持ちを育むことにより、人が皆、自らの意志で敬虔な者となれるようにすることである。しかし、初めの段階では、子供たちに、清潔、礼儀、思いやり、人や神聖な場所に対する敬虔といった特定の習慣について教える必要がある。そして、ひとたび適切な習慣や行動が身につけば、理解力が増すにつれて、本当の意味での悔い改めの気持ちも育つものである。

家庭でのしつけが行き届いているかどうかは、子供の行動を見れば一目りょう然である。しばらく前のこと、ひとりの母親がまだ幼い5人の子供を連れてステークス部事務所にやって来た。夫が高等評議員に任命されることになっていたのである。父親の任命に際して子供たちは皆、静かにいすにのぼり、腕を組み、目を閉じていた。この子供たちの敬虔さは、まるで救い主のみ前にいる時のようであった。

敬虔な者となれるように真心から努めようではないか。敬虔さこそ、霊的な成熟度や強さや気高さを示す尺度である。

神 から民に与えられた数々の輝かしい福音の真理の内、以下に掲げる宣言ほど快い、また心を満たすものは恐らくないであろう。

幼な子は救われる。彼らはキリストにおいて生かされ、永遠の生命を得る。彼らの属する家族は存続し、彼らは完き昇栄を得る。いかなる祝福も差し控えられることはない。彼らは不死不滅の栄光をもってよみがえり、成長して大人になり、そして日の光栄の王国の最高の天界に永遠に住む。これはみな聖なるメシヤの働き、慈悲、恵みによるのであり、私たちが生きられるように主が死んで贖いの犠牲を捧げて下さったおかげである。

先だって高価なる真珠に加えられた、ジョセフ・スミスの受けた日の光栄の王国に関する示現がもたらすひとつの大きな恩恵は、子供の救いに関する教義を新たに研究する機会

を与えてくれたことである。私たちにはこの子供の救いに関して適切な聖典に基づいた解答を必要とする疑問が幾つかある。

主の無限の愛と優しさ、慈悲を示す2つの場面から、子供の救いに関する諸々の事柄を考慮することができる。

第一の場面は、「ヨルダンの向こうのユダヤの地方」であった。大勢の群衆が彼の前にいた。バリサイ人はイエスをわなに掛けようと攻撃的であった。主は折りしも結婚と離婚と家族について話し終えたところであった。マタイは次のように記録している。「そのとき、イエスに手をおいて祈っていただくために、人々が幼な子らをみもとに連れてきた。ところが、弟子たちは彼らをたしなめて言った。『イエスが、幼な子は救われると言っておられるので、その必要はない。』

幼な子の救い

十二使徒評議員会会員

ブルース・R・マッコンキー



するとイエスは言われた、『幼な子らをそのままにしておきなさい。わたしのところに来るのをとめてはならない。天国はこのような者の国である。』

そして手を彼らの上においてから、そこを去って行かれた。』(靈感訳マタイ19:13-15)

第二の場面はアメリカ大陸におけるものである。よみがえり栄光を受けたイエスは、ニーファイ人に導きと恵みを施しておられた。そして、これまでだれひとり捧げたことのないような祈りを捧げ終えたところであった。ニーファイ人の歴史家はこの祈りのことを次のように記録している。「私たちが見たり聞いたりしたイエスの」言葉は、「口で言いあらわせる者もなく、筆で書きあらわせる者もなく、また人間の心で想像できぬほど偉大で驚嘆すべきものである」(Ⅲニーファイ17:17)と。

祈り終えたイエスは涙を流して言われた。

『汝らの子供たちを見よ』……群衆が……見ると、天が開けて天使らが火の中に取り巻かれているような有様で天降り、子供たちを取りかこんだので子供たちもまた火に取りかこまれ、天使らは子供たちに祝福を与えた。』(Ⅲニーファイ17:23-24)

イエスは子供たちを愛し、祝福して下さる。子供たちは天使の友であり、必ず救われる。天の王国は彼らのものである。

以下にあげるのは、子供の救いについてよく尋ねられる幾つかの質問とその答えである。

子供とは何か

子供とは新たに誕生した体に宿る大人の霊である。この体は、私たちの霊の父である天父の計画に従って成長発達する能力を備えている。子供は神の息子、娘である。彼らはこの



世に生まれてくるまでの長い期間、神と共に住んでいた。彼らは生まれる前は大人であり、死後も大人である。天父の長子であるキリスト御自身も、マリヤの胸に抱かれる以前、すでに栄光と昇栄の状態に達しておられたのである。

誕生とは何か

誕生とは、成熟し、感情を有する、英知ある存在が前世から現世に移る過程である。それは、霊として永年過ごす内に獲得し発達させた資質や才能を前世から現世に携えてくる過程である。天父の子孫である永遠の霊を宿す、死すべき体が創造される過程である。そして私たちはこの世に誕生すると、すぐに呼吸を始める。

なぜ霊の子供たちはこの地上に
生まれてくるのだろうか

霊の子供たちは体を得るためにこの地上に
来る。血肉の体、将来不死不滅の状態で再び
受ける体を得るために来るのである。また、
責任を知り得る年齢に達している人々は、成
長し、試練を受け、子供の時のような汚れな
い純粋さを再び得て、神とキリストのおられ
る所へ行く資格があるかどうかを試されるた
めにこの世に来ている。

原罪とは何か

これはアダムの罪が全人類に及んでいるの
で、救われるためには幼児を含めてすべての
人がバプテスマを受けなければならないとい
う誤った教義である。これに対し真実の宗教
の根本的な原則は、「人は皆各々其身にてなし
たる罪に対して罰を受け、アダムの咎^{とが}に対し
て罰を受け」ないとする立場である。(信仰箇
条第2条)

子供たちは原罪で汚れているか

絶対にそのようなことはない。キリスト教
界の信条で定義されているような原罪などと
いうものは存在しない。このような概念は贖
罪の効力を否定するものである。現代の啓示
は、「人のあらゆる霊は、太初^{はじめ}に罪なきものな
りき」と告げている。その意味は、霊は純粋
な罪のない状態で前世の生活を始めたとい
うことである。「而して神は墮落より人を贖いた
もうたるにより、人はみな再び幼児の有様と
なり、神の前に罪なしとなりぬ。」(教義と聖
約93:38) その意味は、すべての子供たちは
贖罪のおかげで現世の生活を純粋な罪のない
状態で始めるということである。啓示も次の

ように告げている。「神の子始祖の罪を贖いた
まえり。贖われたれば両親の罪その子らの頭
に帰すること能わず、彼らは創世の前より全
ければなり。」(モーセ6:54)

子供は罪の内に宿されるのだろうか

近代のキリスト教界で使われているような
意味での原罪が存在しない以上、子供たちは
罪の内に宿るのではない。子供たちは一点の
汚れもなくこの世に生まれてくる。「子らは罪
の中に宿^{うち}さるる」(モーセ6:55)という聖句
があるが、この言葉は世の信条で掲げられて
いるのとは全く違った意味で使われている。
その聖句の意味はこうである。すなわち、彼
らは罪の世界に生まれてくるので、「彼ら成長
し始むるやその心に罪を宿す。而して善き事
を賞美するを知らんがために、苦きことを味
わうなり。」(モーセ6:55)

幼児のバプテスマについてはどうであろうか

予言者モルモンは、他の教義にも増して、
幼児のバプテスマという誤った教義に激しい
力強い非難を浴びせている。彼は、幼児のバ
プテスマについて主にうかがったところ、次
のような答えを受けたのであった。「汝の贖い
主たり、汝の主たり、汝の神たるキリストの
言葉を聞け。わがこの世に降りしは義人に悔
改めを勧むるためにあらず。罪人に悔改めを
勧むるためなり。医者 of 助けを必要とするは
健康なる者にあらずして病人なり。幼児は罪
を犯すこと能わざれば健康なる者なり。従っ
てアダム^{アダム}の受けたるのろいはわれにより幼児
より取り去られてもはやかれらを如何ともす
る能わず。」

そこでモルモンは、聖霊の力によって語り、

幼児にバプテスマを施すことは「^{はなはだ}甚しく神を嘲弄^{ちやうろう}」することであると教えた。また、子供たちは「世の始めからすでにキリストにより救われている」とも教えている。幼児に対するキリストの清い慈悲を否定することは、恐ろしい不義であって、そのような信条はキリストの贖いの力を無視するものである。そのような誤った概念を信じる者は「罪の縄目に縛られて」おり、そのような考えを改めない内に死ねば地獄に投げ落とされるであろう。他方へくりだって悔い改め、バプテスマを受ける者は「幼児と共に救われる」であろう。（モロナイ8：8—25）

子供たちはすべて無条件に
日の光栄の王国に救われるだろうか

この質問に対する答えは断固然りである。イエスはこのことを弟子たちに教えられた。モルモンはこのことを何度も繰り返し述べている。多くの予言者がこのことを語っているし、救いの計画自体がそのことを告げている。もしそうでなければ、贖罪の適用範囲は無限でないことになる。それで私たちが予期する通り、ジョセフ・スミスの受けた日の光栄の王国に関する示現に次のような言葉が見られる。「私はまた、自己の責任を知り得る年齢に達する前に世を去った子供たちがすべて、天の日の光栄の王国において救われているのを見た。」（日の光栄の王国に関する示現10節）

これはすべての人種の子供を含むかという質問が時折出されるが、もちろん答えは然りである。啓示がすべての子供たちと言えよその通りすべての子供たちである。人種、民族、言語による制約は全くない。幼児は幼児であって、彼らは皆キリストにあって生かされて

いる。そしてキリストの贖罪によって皆救われている。

子供たちはすべて日の光栄の王国において救われるという予言者の言葉について、ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は次のように言っている。「これはすべての人種の子供たちを指すものであろう。この世界に来るすべての霊は神のみ前から来るのであるから、神の王国にいたに違いない。……人のあらゆる霊は初めは罪がなかった。そして、背いた者は皆投げ出された。従って残された者は皆福音の祝福を受ける資格がある。」（*Doctrines of Salvation* 「救いの教義」2：55）

子供たちはどのようにして、また
なぜ救われるのだろうか

子供たちは贖罪によって、罪がないので救われる。彼らは神のみもとから清い状態で地上に来る。そして、この世にあっては罪や汚れを負わない。従って清い状態で創造主のみもとへ戻ることになる。自己の責任を知り得る年齢に達した人は、悔い改めてバプテスマを受け、従順に従うことによって清くならなければならない。他方、罪の責任を負う能力のない者は決して霊的に墮落することはないので、霊的な墮落から贖われる必要はない。幼い子供たちはキリストにあって生かされると言われる訳はここにある。「幼き小児らわが生みたる独子によりて世の始めより贖われるなり」（教義と聖約29：46）と主は言われた。

彼らは永遠の生命を得るだろうか

永遠の生命とは、日の光栄の世界の最高の天における生活であり、昇栄である。また、

神が當んでおられる類の生活である。家族の単位が永遠に継続することを永遠の生命と呼ぶ。子供たちは日の光栄の王国において救われるという聖句を前に引用した。しかしここでこれは神の賜の内では最大のものである永遠の生命も含むのかどうかというつっ込んだ問いに直面しなければならない。この場合も、限りなく賢明な神の摂理を考えると答えは肯定的である。救いとは永遠の生命という意味である。このふたつの言葉は同義語であって、全く同じことを意味している。ジョセフ・スミスは言った。「救いとはエホバが持つておられる栄光、権能、尊厳、力、支配力が渾然一体となったものであって、それ以外の何ものでもない。」(Lectures on Faith「信仰講話」pp.63—67) 私たちはこの救いを昇栄と呼ぶ。事実救いは昇栄である。標準聖典のどの聖句も皆昇栄を救いと呼んでいる。私はすべての聖典の中で救いを昇栄以外のもの、昇栄以下のことを意味するものとして使っている聖句を3つしか知らない。

アビナダイは、「幼児も永遠の生命を受ける」(モーサヤ15:25)と言っている。ジョセフ・スミスは次のように教えている。「子供たちは神と子羊のみ前で王座に座すであろう。……彼らはそこで日の光栄の王国で用意される全き光、栄光、英知を享受するであろう。」(Teachings of the Prophet Joseph Smith「子言者ジョセフ・スミスの教え」p.200) ジョセフ・フィールディング・スミス大管長はこの点について次のように非常に明白に語っている。「主はこれらの子供たちに昇栄にかかわる結び固めの祝福をすべて与えられるであろう。私たちは皆生まれる以前には成熟した霊であった。幼い子供たちの体は復活後、霊の成熟

した姿にまで成長する。そして、彼らが死なずに成長していたらこの世で受けていたにちがいない祝福が従順であればすべて彼らに与えられるであろう。主は公正な御方であるから、祝福を受ける前に死んだという理由だけで、人から祝福を取り上げるようなことはなさらない。幼い時に死んだという理由だけで幼児から来るべき世で昇栄に伴うあらゆる祝福にあずかる特権を取り上げるということは、明らかに不公平である。……幼年時代に死ぬ子供たちからは、いかなる祝福も取り上げられないであろう。彼らは復活後霊の大きさにまで成長すると共に、この世で生き長らえていたら得ていたにちがいない祝福を受けるであろう。」(Doctrines of Salvation「救いの教義」2:54)

子供たちは結婚し、家族単位で暮らすのだろうか

その通りである。この点について疑問は全くない。もし彼らが救いを得るとすれば、そしてそれが永遠の生命で、昇栄であるとすれば、彼らは結婚し、家族単位で暮らすであろう。ジョセフ・フィールディング・スミス大管長ははっきりそう言っている。また実際そうでなければならない。(Doctrines of Salvation「救いの教義」2:49—57参照)

なぜある子供は死に、ある子供は生き続けるのだろうか。死ぬ子供は現世に留まる子供よりも恵まれているのだろうか

すべての事柄は私たちの霊の父である神が統べ治めておられるので、私たちは安心していけばよい。神は初めから終わりまですべてのことを知っておられ、私たち一人一人にとつ

て必要であると知っておられる試練を与えられる。ジョセフ・フィールディング・スミス大管長はかつて私に次のように言ったことがある。だれが幼時に取り上げられ、だれがこの世に留まってそれぞれに必要な試練を受けることになるか、主は知っておられ、前もってそのための整えをされることを、私たちは当然のこととして受け入れなければならない、と。これは次のジョセフ・スミスの言葉と符合している。「主は幼い子供たちを大勢取り上げられる。人のしっと、現在のこの世の悲しみや諸悪に巻き込まれないようにするためである。彼らはこの世に住むにはあまりにも純粋で、美しいからである。」(*Teachings of the Prophet Joseph Smith*「予言者ジョセフ・スミスの教え」 pp.196—97) 責任を知り得る年齢に達した人は試練を受ける必要があるということ、万物の計画から明らかである。私たちの問題は、この世を克服して、幼い子供たちがすでに達している清く汚れない状態に到達することである。

子供たちはこの世に生まれる前にどれくらい神について、また救いの計画について知っているのだろうか

この世に生まれてくる人はひとり残らず神のみ前から来る。そして私たちは皆その永遠の世界で神を見、神のみ声を聞き、神の律法について教わった。私たちはキリストについて知り、キリストが私たちの救い主、贖い主に選ばれた時にキリストに従う道を選んだ。私たちは福音の計画を理解し、知っていた。それでこの救いの計画の一部として肉体を得る特権にあずかることを知って、歓喜の声をあげた。創造主のみもとに清く汚れない状

態で戻る子供たちは——実際には大人であるが——かつて知っていた福音の知識を得るであろう。

子供たちも試しを受けるだろうか

絶対そのようなことはない。彼らがパラダイスで、あるいは福千年の間もしくは後に試されるという考えは、全くいいかげんな考えである。日の光栄の体をもって墓からすでによみがえった者が、しかも救われると保証されている者がどうして試されることがあるのか。試練に屈することがなく、昇栄が保証されている人を、主は試されるだろうか。この件について言えば、サタンが縛られる福千年の



間に生まれる何十億もの人々は「罪を犯すことなく育て救いに入る」(教義と聖約45:58)。従って試されることはない。「サタンはこの世においても、霊界においても、また復活後も幼な子を試みることはできない。責任を知り得る年齢に達する前に死ぬ幼な子は試されることはない。」(*Doctrines of Salvation* 「救いの教義」2:56—57) このようにジョセフ・フィールディング・スミス大管長は強い語調で述べている。

責任を知り得る年齢とは 何歳のことだろうか

責任を知り得る状態というのは、子供の生涯の特定の時期に突然開花するものではない。子供は何年もかかって徐々に責任の取れる状態になるのである。従って、責任を知り得る状態になるというのは、特定の年月がたてば到達できるという目標ではなく、ひとつの過程である。主は啓示の中で言われた。「幼き小児らは罪を犯すこと能わず。サタンは、幼き小児ら成長してわが前に責任を知り始むる年までこれを試むる能力なければなり。」(教義と聖約29:47) しかし正常に成長する者であれば、現実に責任を知り得る状態に達し、生活の中に罪が入ってくる時がやってくる。それは8歳すなわちバプテスマを受ける年齢である。(教義と聖約68:27参照)

責任を知り得る状態についてのこの教えは歪曲され、しばしば忘れ去られている。モルモンが幼児のバプテスマについて主に伺った時、この問題がその根底にあったのである。(モロナイ8章参照) この教えを最も的確に示すのは、アブラハムに対する主のみ言葉である。主は言われた。「わたしの民はわたしの

教えから離れ去り、わたしが彼らの先祖に与えた儀式を守らなかった。

また彼らは灌油と埋葬、すなわちわたしが彼らに命じたバプテスマを守らなかった。

そして彼らは戒めに背を向け、子供の洗いと血をふりかけることを取り入れた。」(靈感訳創世17:4—6)

このように当時すでにある人々は幼児のバプテスマを行っていた。理由は何であろうか。人々がもはや贖罪を理解していなかったからである。続いて記録されているように、古代の民は「義人アベルの血は罪のために流されたと言った。それは彼らがわたしの前にどのような責任があるかを知らなかった」からである。(靈感訳創世17:7)

続いて主はアブラハムに次のように約束された。「わたしはあなたと割礼の契約を交わす。これはわたしとあなた及び後の代々の子孫との間のわたしの契約である。子供たちは8歳になるまでわたしの前に責任を知り得る状態にないことをあなたがたが永遠に知るためである。」(靈感訳創世17:11)

精神的な欠陥のある者については どうだろうか

この人々についても幼い子供たちと同じことが言える。彼らは責任を知り得る年齢に達することは決してない。従って、幼い子供たちと同様に見なされる。何らかの肉体的な欠陥か、私たちにわからない他の何らかの理由で霊的にも精神的にも決して成熟することがなければ、彼らは決して罪に対して責任を取れる状態にはならない。従って、彼らはバプテスマを受ける必要がなく、キリストにあって生かされている。そして、子供たちと同じ

ものを受け、継承し、所有するであろう。

幼い子供たちは、私たちすべてを救うために死なれた御方の贖いの犠牲によって、世の基が据えられた時から贖われている。サタンは、子供たちが責任を知り得る年齢に達すまで、彼らに対して何の力も持たない。主は以上のことを啓示されてから、同じ原則を精神的な欠陥のある人々にも適用して言われた。「而してわれまた、誠に汝らに告ぐ。およそ知識ある者にわれ悔い改めよと命ぜりしか。されば、いまだ覚らざる者はただ誌されたるままに為すのみ。」(教義と聖約29:49—50)

子供たちはいつ、どんな姿で復活するのだろうか

子供たちは日の光栄の王国を受け継ぐので、第一の復活によみがえるであろう。ジョセフ・F・スミス大管長は言っている。「ジョセフ・スミスは、死んでこの世を去った幼児は復活の時子供の姿でよみがえると教えた。そして子供に死なれた母親に向かって言った。『あなたはこの子が復活後、霊の成熟した姿に至るまで育てる喜びと楽しみと満足を得るでしょう。』死から復活した後に回復があり、成長発達がある。私はこの真理が好きである。この真理は私の霊に豊かな幸せ、喜び、感謝の念を起こさせる。私はこの原則を私たちに啓示して下さった主に感謝している。」(*Gospel Doctrine* 「福音の教義」 pp.455—56)

子供たちに対する私たちの責任は何か

「見よ、子供たちは神から賜わった副業であり、胎の実は報いの賜物である。」(詩篇127:3) 私たちの子供は天父の子供である。神は一時子供たちを私たちに託されたのである。

従って私たちの義務は、子供を光と真理の内に育て、彼らが永遠の神のみ前に戻れるようにすることである。

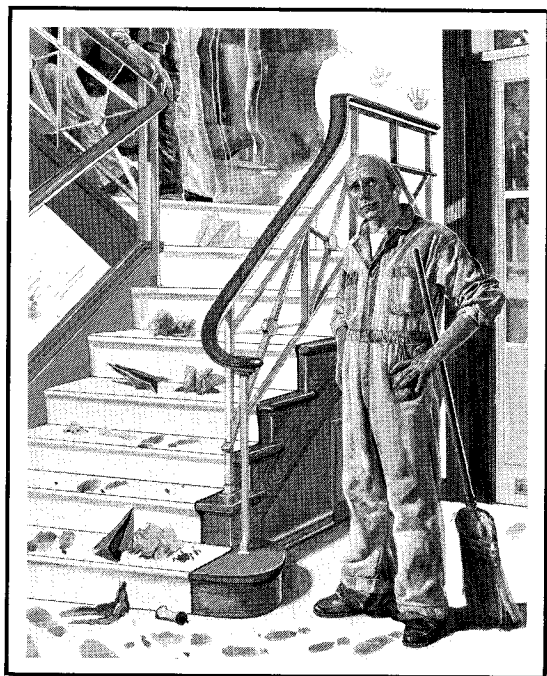
シオンの両親は託された霊の世話をし、彼らを幸せにする特別な責任を負っている。ベンジャミン王はこのことを次のような言葉でまとめている。「またお前たちは、自分の子供らを飢えさせたりはだかのまま置いたりはしないであろう。またお前たちは自分の子供らが神の律法に背き互いに争ったり戦ったりして、私たちの先祖が言った悪魔すなわちあらゆる義しさの敵であって罪の頭である悪魔に仕えることを許さず。

お前たちは自分の子供らに真の道を行う事と真面目でなければならぬ事と互いに愛し互いに助けねばならぬ事とを教えるであろう。」

(モーサヤ4:14—15。教義と聖約68:25—28 参照)

では子供の救いに関するこの輝かしい教義は一体どんな教義なのだろうか

確かにこの教えは福音の教義の中で最も美しく心を満たすものである。また、予言者ジョセフ・スミスが神から導きを与えられていたことを証明する貴重な証拠のひとつである。当時キリスト教界の熱烈な説教者たちは、地獄への道は幼な子の骸骨で敷き詰められている、これは不注意な親が子供にバプテスマを施すことを怠ったからである、と説教壇から大声で説いていた。モルモン経と末日の啓示に記録されたジョセフ・スミスの言葉は、「幼な子は救われる」という純粋な真理に涼風を呼び込むこととなった。清く罪のない子供についてみこころを明らかにしたもうた神に、私たちは感謝すべきである。



教会管理人の 立場から

ローラ・J・エイシー

私 たちは夜になるまで、「引き受けようかどうか」と話し合いました。神権会で監督から、ステーキ部センターの専任の管理人を募集していることが発表され、その会のあとで夫のエイスにその話があって、妻の私と相談してから翌朝 3 人の監督と会って下さいと言われたのです。

彼はそういう仕事が好きかしら？ 3 つのワード部とひとつのステーキ部を抱える大きな教会堂でした。いろいろな活動に伴って、仕事は山とあることでしょう。私もオルガンやピアノを拭いたり窓をみがいたり、きっと手伝わなければならないことでしょう。家は近くでしたから、昼食には帰って来られるし、

交通費はいりません。今勤めている鉛管工事の会社では、日に照らされ、雨風に打たれ、雪に凍えながら何時間も働かなければなりません、管理人の仕事をすればそんな苦労もなくなります。倉庫の管理人のように夜中の仕事でもありません。でも、59歳で職を変えらるというのも大変なこと。もし新しい仕事がかまくゆかなかったらどうでしょう。

月曜日に一大決心をしました。管理人の仕事を引き受けることにしたのです。エイスは承諾の返事を伝えて、日曜日にふたりで教会へ行って、初めて建物を見て来ました。しなければならぬ仕事はたくさんありました。

最初の仕事はホールの両側にある階段の掃除でした。幅は片方が1.2メートル、もう片方が1.8メートル、どちらも17段ありました。長い間掃除をしていなかったの、白っぽくほこりが積もって、靴の跡や汚れがこびりついていました。石けん水やクレンザーや金だわしを使って、きれいにするのに2時間かかりました。でも、淡いクリーム色のビニール張りの階段が、茶色の縞模様の大大理石のようになった時、どんなにうれしかったことでしょう。

エイスには、修繕したり交換したりという仕事がいっぱいありました。建物の出入口のドアの錠を全部取り替え、洗面所や文化ホールのドアの掛けがねも新しくしました。女性用更衣室にシャワーを取りつけ、どういふわけかそれまでは部屋の中央にあったロッカーを元のよう壁につけました。機械室に積み重ねてあった壊れた教室机を幾つか修繕しました。

ところが、私たちが働くようになって間もなく、コンクリートで固められた中庭にステ

ーキ部長室と高等評議員会室を建てる工事が始まりました。工事は毎日少しずつ行なわれ、中庭のコンクリートを壊すのにドリルを使うので建物の中がほこりっぽくなりました。掃除をすませたと思うと、また工事が始まるといった具合で、事情を知らないワード部の人々からはいろいろと言われました。このような状態がおよそ3ヵ月続きました。

またある日、子供日曜学校の部屋でユースコンファレンスが行なわれることを知らされました。指導者から部屋を特にきれいにしてほしいと頼まれたので、私たちは勇んで仕事にかかりました。窓や木造部を全部洗って、床を拭いて、磨いて、カーテンはクリーニングに出しました。何もかも輝くようになりました。ユースコンファレンスが終わってから、みなさんに喜んでいただけたかしらとエイスに聞くと、彼が言うには、「いや、ある副監督から椅子をもうちょっときれいにしてほしいと言われたよ」ということでした。出席者が多くて椅子が余分に必要だったので、だれかが建築現場から椅子を運んできたのでした。それが自分たちのしたことではなかったことを知って、思わず苦笑してしまいました。

建物の壁を全部洗うのには、かなり時間がかかりました。洗面所から始めて玄関やホール、扶助協会室、高等評議員会室、教室。ヒーターやドア枠や階段の手すりや玄関その他はペンキを塗りました。玄関と扶助協会室のじゅうたんはすり減って、ジュースのしみなど取れない汚れがついていました。そこでエイスが監督たちに、じゅうたん専門のクリーニング屋を頼んでどうかと話すと、近々新しいじゅうたんに替えるからそのまま良いという返事でした。それから数週間後、エイ

スはじゅうたん用の洗剤を借りて来て、自分でじゅうたんを洗いました。そのため、じゅうたんは見違えるようになりました。こうして建物は少しずつきれいになってきました。

管理人の仕事始めてから2年後に、もうひとつのワード部がこの建物を使うことになり、全部で4つのワード部になりました。月曜日から木曜日まで毎日扶助協会が開かれ、役員たちは朝早く8時半に教会にやって来ます。その時間までに、扶助協会室と玄関、台所、階段、託児室、洗面所の掃除をすませておかななくてはなりません。それから、扶助協会が行なわれている間に、残りの教室と礼拝堂、それに文化ホールを掃除するのです。

また、3時になると初等協会の役員がやって来ます。ですから、扶助協会室、託児室、台所、洗面所をもう一度見て、汚なければ掃除します。そして、初等協会が終わると、椅子を集め、拭いて整頓します。また、黒板をきれいにし、夜の活動に備えます。それが1年ほど続いて、2つのワード部がほかの建物に移って行きました。その時には、何だか休暇をいただいたような感じがしました。

天気の良いある朝のことでした。私たちはセールスマンから、ステンレスの洗し台など金属製品に使える化学洗剤を買いました。私はそれを使って、汚れがこびりついて薄皮が張ったようになっているしんちゅう製の電気のスイッチプレートをきれいにしようと思いました。5、6個きれいに磨き上げた後、男性用の洗面所に行って、今度は3つのスイッチがついているプレートがきれいにしようと思いました。プレートを化学洗剤できれいにし、次にぬれたスポンジを取ろうと手を伸ばした時、パチパチという音がしました。振り

返ると、プレートが火を吹いて、火は天井に届きそうでした。私は「火事だ！火事だ！教会が燃える！」と金切り声をあげながらホールに駆け込みました。するとエイスはホールに飛び込んできて、洗面所に突進しました。火はすでに消えていて、まっ暗でした。スイッチボックスは焼けこげていました。私はこのことから化学薬品と電気は相性の悪いことを知りました。

去年の夏は、月曜日の朝から2週間の休暇をいただきました。ところが、エイスは土曜日ごとに帰って、日曜日のために建物を掃除するというのです。けれども、私は休暇の途中で帰ることが不服でした。私は掃除しながらひとりで考えました。「ばからしいったらありやしない。きれいであろうがなかろうが、だれも気にしていないのに。気にしていたら、ごみを投げ捨てたりしないはずだわ。掃除をしても気づく人なんていないでしょうに。」

するとその時、だれかがそばにるように感じました。だれかが私にこう言ったような気がしました。「見ているよ。ここは私の家だ。私が見ている。明日訪問者があって、この家が汚れていたらどうだろう。求道者はどう思うだろう。恥ずかしいことだ。」私はぶるぶる震えました。それほど強烈な印象を受けたのでした。それから、二度と、主の家を掃除する時間をもったいないと思ったことはありません。

管理人として働き始めた最初の数ヵ月間は、あまり教会員から声をかけられず、またやさしく声をかけられたとしても儀礼的であるかのように感じられました。しかしだんだんなじむに従って、みんなの態度が変わってきました。エイスはいつも教会にいて、テーブル

を出したり、そのほかいろんな手伝いをしました。彼のいる時には建物の中でバスケットボールやバレーボールをさせてあげるの、子供たちや独身成人の人々と仲良くなりました。その結果、特に日曜日に備えて建物をすっかりきれいにした土曜日などは、玄関にどろの靴あとをつけないように気をつけてくれるようになりました。

1年ほど経つと、人々はさらに暖かく接してくれるようになりました。初等協会の教師や子供たちから、果物やお菓子やクリスマスプレゼントをいただいたりしました。ある年には、少年たちが、厚紙と砂糖菓子で造ったキリストの降誕の情景を描いた作品を贈ってくれました。松かさと木の実で作った飾りも一緒に。また別のワード部の初等協会では、「建物のお掃除ありがとう」と書いた愛情の込められた美しい色紙にみんなの名前を書いて贈ってくれました。

扶助協会は、ホームメイキングの日に必ずエイスを昼食に招いてくれました。また、大会に訪問された教会幹部の歓迎夕食会に招待されて、ステーク部長会や高等評議員と一緒に食事をしたこともあります。

私たちは主の家を6年間守って、去年の春に退職しました。その間、私たちは一生懸命に働きました。楽しいこともあり、つらいこともありました。けれどもたくさんの友達ができました。その間に敵を作っていなければよいがと思っています。

涙と苦勞の多い日々でしたが、同時にそれは私たちの人生にとってとても素晴らしい経験となっています。

私の父の家：

教会管理人を手伝おう

末日聖徒独特の教会堂が全世界に何千とある。それらの教会堂は、私たちの礼拝や勉強や各種の社交活動を靈的な雰囲気の下で行なえるようにするという尊い目的をもって、週に何時間、何十時間も教会活動に役立っている。

しかし、清潔で快適な美しい建物を維持するには大変な努力を要する。まず建設に際しては、教会員が時間とお金を、それも時には多大の犠牲を払わなければならない。そして完成後は、神権指導者と管理人が力を合わせて建物と敷地の管理に当たる。とはいえ、建物の管理には教会員も以下の点に気をつけて大いに協力すべきである。

1. 立派な働きをしている管理人に感謝する。管理人の休暇中に代わりをつとめたある姉妹がこう言った。「教会員がみんなこの仕事をしてみればよいと思います。管理人の苦勞を自分で経験すればありがたさがわかって、散らかす気持ちにならないでしょう。」

2. 管理人にはその建物で行なう活動の監

を出したり、そのほかいろんな手伝いをしました。彼のいる時には建物の中でバスケットボールやバレーボールをさせてあげるの、子供たちや独身成人の人々と仲良くなりました。その結果、特に日曜日に備えて建物をすっかりきれいにした土曜日などは、玄関にどろの靴あとをつけないように気をつけてくれるようになりました。

1年ほど経つと、人々はさらに暖かく接してくれるようになりました。初等協会の教師や子供たちから、果物やお菓子やクリスマスプレゼントをいただいたりしました。ある年には、少年たちが、厚紙と砂糖菓子で造ったキリストの降誕の情景を描いた作品を贈ってくれました。松かさと木の実で作った飾りも一緒に。また別のワード部の初等協会では、「建物のお掃除ありがとう」と書いた愛情の込められた美しい色紙にみんなの名前を書いて贈ってくれました。

扶助協会は、ホームメイキングの日に必ずエイスを昼食に招いてくれました。また、大会に訪問された教会幹部の歓迎夕食会に招待されて、ステーク部長会や高等評議員と一緒に食事をしたこともあります。

私たちは主の家を6年間守って、去年の春に退職しました。その間、私たちは一生懸命に働きました。楽しいこともあり、つらいこともありました。けれどもたくさんの友達ができました。その間に敵を作っていなければよいがと思っています。

涙と苦勞の多い日々でしたが、同時にそれは私たちの人生にとってとても素晴らしい経験となっています。

私の父の家：

教会管理人を手伝おう

末日聖徒独特の教会堂が全世界に何千とある。それらの教会堂は、私たちの礼拝や勉強や各種の社交活動を靈的な雰囲気の下で行なえるようにするという尊い目的をもって、週に何時間、何十時間も教会活動に役立っている。

しかし、清潔で快適な美しい建物を維持するには大変な努力を要する。まず建設に際しては、教会員が時間とお金を、それも時には多大の犠牲を払わなければならない。そして完成後は、神権指導者と管理人が力を合わせて建物と敷地の管理に当たる。とはいえ、建物の管理には教会員も以下の点に気をつけて大いに協力すべきである。

1. 立派な働きをしている管理人に感謝する。管理人の休暇中に代わりをつとめたある姉妹がこう言った。「教会員がみんなこの仕事をしてみればよいと思います。管理人の苦勞を自分で経験すればありがたさがわかって、散らかす気持ちにならないでしょう。」

2. 管理人にはその建物で行なう活動の監

督を頼まない。管理人には仕事に専心してもらおう。建物を使用する活動の司会や活動後の施錠などは、他の成人の管理者がいて責任を持つ。

3. 管理・維持に要する経費の財政援助をする。これは各家族が割り当て分を献金することによってまかなわれる。

4. 多方面から管理人に指示の来る場合があるが、緊急事態と幾らかの日課を除いては、代表監督と総合施設代表者が管理に関する指示を与えることになっている。活動計画に従って建物の用意ができるように、予定表を管理人に渡すとよい。

5. 建物の鍵を持っている神権指導者や補助組織指導者は、信頼されていることをよく認識して、許可なしに人に貸与したり鍵を複製したりしない。開けた錠は必ず自分で閉める。

6. 特別行事の装飾に、ろうそくなど、火を使用してはならない。また、ある種のテープは塗装面を損うということを、教会員は知っておくべきである。

7. 物置きは火災防止のために定期的に片づける。神権指導者や補助組織指導者は、可燃物を物置きにしまってはならない。特に機械室には物を置かない。

8. 建物内外の異常や異臭には教会員全員が気をつけ、モーターの損傷や暖房機の過熱その他で事故に至る前に通知するようにする。

9. 建物に関係する奉仕計画は、費用の節約以外に、建物維持の苦勞に対する感謝を学ぶ機会を与える。労働奉仕については、建物の美化が目的であることを各自が知っておくべきである。

10. エネルギーの消費節減に努める。必要のない時は電灯や音響装置のスイッチを切っておく。暖冷房時や部屋を使用しない時は窓を閉めておく。エネルギーの消費節減は経費節減にもなる。教会員は全員これを心掛ける。

建物と敷地は主のものである。これらは献堂の時に主に捧げられ、教会員は客として建物に入り、建物を使用するのである。従って、常に気高い精神が保たれるように建物を清潔に体裁よくしておく必要がある。この原則を私たちの家庭で教え、また教会でも私たちの言動を通じて教えなければならない。

教会には現在美しい建物が数多くあるが、教会の発展に伴ってますます多くの建物が必要になる。私たちは現在使っている建物を良く管理して、末長く使用できるように、また主の家の尊厳を反映できるように努めようではないか。

学習の種

セオ・E・マキーン

数 週間前に、私たち家族は菜園に種をまいた。私の指示に従って息子たちがほとんどの作業をした。だからといって、私が怠けたというわけではない。もし父が同じような方法で教えてくれていなかったら、自分もどう教えたらよいかわからず、さらに、私の子供たちも孫にどのように教えたらよいかわからないだろうと考えたからである。そうであってほしくないと思う。

それと同じように、私たち福音の教師は子供や生徒を働かせる時に自分を怠け者だと考える必要はない。私たちにできる最も価値あることのひとつは、彼らに福音の学習法を教えることである。「個人の証はこの教会の力である。従って、教会員は皆自分自身の証を持たなければならない。」(ボイド・K・バックナー、*Teach Ye Diligently*「熱心に教えよ」p.208。

『自立』『聖徒の道』1976年4月号、p.207参照)

生徒の努力

説き、教え、^と教養、勧め、真理を宣言することが私たちにとって大切なように、生徒にとっては、自分で努力して自分自身の証を得ることが大切である(アルマ34:37)。読んで(アルマ33:14)、考え(ヒラマン10:2-3)、求め(Ⅱニーファイ32:7)、努めはげむ(Ⅱテモテ2:15)ことが必要である。

願ひ(Ⅱニーファイ4:35)、求め(申命4:29)、叩く(Ⅲニーファイ27:29)こと。

望み(Ⅰニーファイ11:1)、尋ね(教義と

聖約6:11)、心にとめ(ピリピ4:8)、書き記す(教義と聖約69:8)こと。そしてみ言葉を聞くだけではなく行なう者となって(ヤコブ1:22)、実践する(アルマ34:32)ことが必要である。

私たち教師は、生徒に以上の努力をするように導く責任がある(「聖徒の道」1977年4月号の「福音の教授と学習」の図を参照)。

人に魚を与えれば一日の糧になるが、魚の獲り方を教えれば一生の糧になるという言葉がある。

教師の準備

人に勉強の仕方を教え、学習意欲を持たせることは必ずしも容易ではない。教師は生徒に望むことを全部自分自身で行なうほかに、生徒を引き込むレッスンや問題も準備しなければならない。

わが家の菜園計画でも私自身の準備が大切であった。どんな質問にも答えられるように用意しておかなければならなかったのである。簡単な質問には「それで良い」、「だめ」で答えられたが、少しむずかしい質問は「くわをこういうふうに握って(実際にやってみせて)、土をこうして耕す。実際にやってみればわかるよ」というように答えなければならなかった。

私は息子たちに道具を渡し、いろいろと手伝った。一番大切なのは、手に良い種を握らせることであった。種というのはいろいろな点で、聖典に記されている生きた種によく似ている。

「見よ、種まきが種をまきに出て行った」という言葉で説きおこし、福音を学ぶ方法について多くのことを教えるあの靈感豊かなたとえ話によって、言わんとするところを展開されたのは、ほかならぬ救い主である(マタイ13:3-13参照)。

アルマは、「今、神の御言葉を種子になぞらえて話すと」(アルマ32:28)と、同様の方法を用いている。

私はその時、自分でよく見ることができるよう、一人一人に数粒の種を渡した。子供たちは、歯ぐらいの大きさの小さなとうもろこし粒が一食ではとても食べきれない量になることに興味をそそられていた。

しかし、そのような話を耳で聞くだけ、あるいは種を握っているだけでは充分でない。実際に種をまかなければならない。アルマはこう続けている。「あなたたちが一つの種子を自分の心の中に蒔くとき、もしもその種子が真理の種子すなわち善い種子であって、あなたたちが不信心の心でこの種子を抜きとったり、主の『みたま』に逆らったりすることがなければ種子は次第に胸の中でふくれ始めるであろう。そこで、あなたたちは種子がふくれ始めることを感ずると、次のように思う。すなわち、これはまことに善い種子、善い言葉に違いなく、私の心を大きく開き、私の理解力を増し、私はようやく好い味を感ずると。」(アルマ32：28)

収穫の確信

子供たちは、新鮮な野菜はどんな味かと楽しみにしていた。そして、「早く植えようよ。」「いつになったら食べられるの。」「明日になったらいいの」と口々に言った。

アルマはそれにこう答えている。

「神の言葉がすでにあなたたちの心を大きく開き、種子のように芽を吹き出したのであるから、あなたたちは自分の理解力が増し、自分の頭が開けてくることを感じて知っている。……

今、あなたたちはすでにこの光を経験したのであるから、あなたたちの知識は完全であるか。

いやそうではない。あなたたちは、ただ種子の善し悪しを試みるために、種子を蒔いてみることにだけ信仰を用いたのであるから、その信仰をすててはならない。

種子から生える木が生長し始めると、あなたたちは『さあ、この木が十分に根を下ろし

て生長し、私たちのために実を結ぶようによく注意して養い育てよう』と言うが、今あなたたちがよく注意してこの木を養い育てるならば、根を下ろして成長し実を結ぶであろう。」

(アルマ32：34—37)

子供たちは勇んで種をまいた。そして、自分で働いて、自分で学び始めたのである。

最後まで耐え抜く

子供たちには忍耐を教える必要があった。この日に始めた良い仕事を、毎日、毎週続けなければならないのである。

ここで、もう少し真理の原則を話し、教え、説明し、自分の選んだ方法でとにかく伝えることが大切だと思われた。菜園でも教室の授業でも、成長は一時の出来事ではなく、ある期間を要する過程であるということを理解させることが必要である。そこで私は次のように言った。

「待っただけじゃない。働きながら待つんだよ。養分や水を土に施し、土を耕して豊かにする。そして、特に日陰で昼寝をしていた方がどれだけ楽しめない暑い日でも、一生懸命に働かなければならないんだ。ほかにしたいことがある時でも、そのように働こうという気持ちを保たせるのが、その人の信仰だ。今しがたまで手に持っていた小さな種の可能性を忘れちゃだめだよ。」アルマは種のたとえ話の中でこう言った。「しかし神の御言葉である木が生え始める時からその実の生る時を待ち設けながら勉めはげんで、気長によく信仰を以てこれを養うならば、その木は根を下ろして永遠の生命を生ずる木になるであろう。」

(アルマ32：41)

アルマはこうも警告している。「もしあなたたちが木を放っておいてこれを養い育てることに心を配らなかつたならば、根がつくことなく、太陽が出てこれを照らしこれを熱するならば、根がないから枯れてしまうであろう。このときあなたたちはその木を抜いて捨てるのである。

しかし、木がこのように枯れるのは種子が悪かったためでもなく、また実がなったときその実が悪いためでもない、その土地が荒地であってしかもあなたたちが木を養い育てないためである。それであるから、その実をとることができない。」(アルマ32：38—39)

成長させて下さるのは神である

生徒や子供たちに良い種を与え、それを言葉と研究と祈りによって養い育てるように教えた上で、最後に私たちはパウロの言ったこの言葉を心に銘記しなければならない。「わたしは植え、アポロは水をそそいだ。しかし成長させて下さるのは、神である。」(I コリント 3：6)

間接経験から得られるもの

フィリップ・C・スミス

自分の生涯でしようとするををよく吟味して選択するならば、時間的にみて、優先順位の極めて高いものを行なわざるを得ないはずである。例えば、福音をよく理解している母親なら、職業に就くことよりも、親としての務めを果たすことを優先する。青年なら、人生の裏街道を歩いてみたいという欲望に打ち勝って、もっと積極的で、進歩的な経験をして人生を築き上げようとする。

間接経験では、決して物事を深くは理解できないと感じている人々が大勢いる。そういう人は、貧乏な人間だけしか、本当の意味で貧困は理解できないと言う。また、罪を犯した人しか、罪の性質やその結果を知らないと言う。直接経験に代わり得るものは何もないと主張するのである。

このような論法には、少なくともふたつの点で説得力に欠けるところがある。まず第一に、罪の概念を理解するため、また罪を犯している人を助けるためにと言って、罪を犯しやすい環境の中で生活することには危険が伴う。他の人を救い出したいと思いつつながら、自分がそのえじきになってしまうかも知れない

からである。例えば、麻薬がどんなものか知るために麻薬を服用したら、他の人を救うよりも、むしろ自分がそのとりこになってしまう可能性がある。第二に、この論法には、聖霊を通じてそのようなことが理解できるという事実と、人は感情移入によってイエスのように、罪が人にとってどんな意味を持つかわく理解できるようになるという事実の見落としがある。

イエスは、罪を犯したことがなくても、罪人以上に罪についてよく理解しておられた。代々の予言者は、罪の結末を「間接的ながら」十分に観察しているために、適切な指導を与えて、罪を克服しようとする人々の手助けをすることができるのである。

感情移入によって霊的に導かれている限り、人は罪を犯さなくても、罪の性質について深く理解することができる。それは、感情移入を行なう者はただ理解しようと努めるだけであって、行動を正当化しようとする時に生じる知覚のひずみとは無縁だからである。

(フィリップ・C・スミス プリガム・ヤング大学ハワイキャンパス教育学准教授)



家族としての 永遠の喜び

日本大阪北ステーキ部
京都ワード部
奥村 幸一
久美子

みなさん、こんにちは。私達は末日聖徒イエス・キリスト教会の家族です。家族と言っても、今年の春結婚したばかりの若い家族です。恵まれて来年の春、神様の子供を授かる予定です。住居は京都市内の比較的にすばらしいアパートの2DKです。私はサラリーマン四年生、妻は今春大学を卒業した社会人一年生です。私達の生活は月曜日から土曜日まで、朝、私は会社へ、妻は家事にと忙しい日々ですが、たまには休みをとって二人で映画を見たりなどして楽しむこともあります。みなさんからご覧になった私達家族は日本全国に幾万とある新婚家族と少しも違わない、よくある家族だと思います。

もちろん新婚家庭ですから、二人の将来には様々な夢があります。子供が生まれて来ることなど、生活を楽しく希望あふれるものにする要素は私達の生活にもあります。確かにそれもあるでしょう。しかしながら、それらによってのみ生活に喜びがあるわけではありません。それは、家族が本当に幸福になる方法を私達は知っているからです。世の中は物騒で人の愛が少し薄くなって来ているように感じます。誕生したばかりのわが子を捨ててしまう母親などそのよい例ではないでしょうか。私はこのような話を耳にすると心が沈みます。そんな時、ああ、世の人々がみんなこの幸福になる方法を知っていたらよいものを、そう

したら家庭の不和、離婚、非行など多くの悲しむべきことがなくなり、誰も相争う者もなく、妬むこともなくて秩序正しい社会生活を営み、一致と喜びにあふれた家庭生活が送れるのと思います。

家族には何が大切ですか。まだ数ヵ月の若輩ですが、私達はそれを知っていて、さらに生活の中に生かしています。楽しいです。喜びがあります。試練にもゆるぎません。生活を築き上げようという意欲に燃えています。二人が互いに一致しようと努めています。日日の生活が、一日一日が本当に生産的で充実しています。それは私達はこの世限りの夢や希望を持っているのではなく、永遠にわたって希望とその確信があるからです。永遠のために生活し、永遠のために行動し、永遠のために備え、永遠の永きにわたる目をもって物事の価値を判断します。もちろん私達は社会にあって立派であり、義務を果たすに忠実な公民でありたいと願っております。また生活設計も正しく立案し、住居、子供の教育、両親の世話などこの世の大切な事柄は決しておろそかにしてはならないものであると知っており、そのような二人でありたいと努めております。

しかし、家族が死後にも一緒に住めると聞いたら、みなさんはどうお受取りになりますか。私達はこのことを真実として知っているのです。死んでしまった人はもうそれで無とになってしまうのでしょうか。決してそうではありません。彼らはすべて時が来たら復活します。そしてその霊と、こんどは朽ちることのない完全な肉体とが髪の毛一筋も失われずに合わさり蘇ります。これらの復活はイエス・キリストの聖なる贖いによるのです。

私達家族は、この復活と永遠の生命ということ単なる人生訓として、あるいは単なるこの世のお飾りとしてではなく、まさに真実であると知っているのです。すべての人は時が来ると復活し、イエス・キリストと天父なる神の御前に立ちます。そして、二度と死ぬことのない体となった私達は、結び固めの聖い力により、父・母・兄・弟・姉・妹・祖父・祖母……とみんなと一緒に住めるようになるのです。

お父さんを失って悲しむあなた、お母さんを失って悲しむあなた、夫を亡くして力を落とすあなた、子供を事故で失ったあなた、あなたがたに私は誠心誠意申し述べたいと思います。何も嘆き悲しむことはありません。来世においてあなたは愛する家族と再び抱き合い、手を取り合えるのです。そこにイエス・キリストの贖いと天父の偉大なる人類の救いのみ業があります。私達家族はこれらのことを知って生活の第一目標にしています。私達の生活について目標と希望があるのは、この世のことばかりでなく、永遠にわたる道と宝とを見いだしているからです。

私達は神様のみもとにあって永遠の家族となる方法と儀式と権能とがこの末日聖徒イエス・キリスト教会に確かにあることを証します。

主は実に生きておられます。私が以上述べたことが真実であることを、心からへりくだり証申し上げます。

イエス・キリストの御名により証しました。
アーメン。

(1977年9月24日)



世界で一番の幸福者

トーマス・ライス兄弟は断食証会で、
次のように証しました。「わたしは
世界で一番の幸福者です。これはみんな、
わたしの子供を初等協会へ連れて
行ってくれたとなりの女の子のおかげ
です。この女の子は土曜日の朝になると、
かならずわたしの家へ来てベッキー
を起こし、初等協会へ行くしたくを手
伝ってくれました。

ベッキーが初等協会へ行くようになって
少しすると、ふたりの宣教師がわたしの
家をおとずれて、教会のことに
ついて話してくれました。わたしたち
がまだペンシルベニアにいたころ、わ
たしたちはほかの教会へ熱心に通って
いました。でもオハイオ州へ来てから
はどの教会へ行こうかまだまよって

たのです。

宣教師と会って勉強するうちに、福
音の計画がどういうものかよくわかる
ようになりました。そしてまもなく、
わたしたちは福音が真実であるという
証を持つことができたのです。

ベッキーを初等協会へさそってくれ
たその女の子を見るたびに、わたしは
かたに手をおいて、『わたしたちを教会
へ連れてきてくれてありがとう。家
族みんなが君を愛しているよ』と言
いたくなるのです。神殿結婚や伝道、ま
たワード部やステーク部で働くこと
によって、わたしたち家族はたくさんの
祝福をいただき、本当の幸福を得るこ
とができました。」

家^{いえ}に帰^{かえ}ったフレダはだよろこびです。^{おお}
また家族^{かぞく}といっしょにくらせるか
らです。フレダは点字^{てんじ}を習^{なら}うためにと
くべつな学校^{がっこう}へ行^いっていました。そこ
ではじょうずに歩^{ある}くれん習^{しゅう}もしました。
フレダは目^めが見^みえないのです。

みんなが行^いっている学校^{がっこう}へかよい始^{はじ}
めました。でも、フレダは点字^{てんじ}の本^{ほん}で
勉強^{べんきょう}するのです。みんなと同^{おな}じことが

したいとどんなに思^{おも}ったことでしょう。
先生^{せんせい}が、もうすぐ図画^{ずが}と工作^{こうさく}コンク
ールがあるとはいっぴょうしたとき、なに
か作^{つく}ってみたいと思^{おも}いました。

でも、フレダには絵^えがかけません。
青^{あお}がどういいう色^{いろ}なのかも知りませんで
した。青^{あお}も赤^{あか}も黄^き色^{いろ}も；フレダにとっ
てはみんな同^{おな}じ色^{いろ}に思^{おも}えました。

家^{いえ}に帰^{かえ}ると、フレダはコンクールに

指でも見えるわ

おはなし

エレイン・C・スミス



なにを出そうかとあれこれ考えました。ねこのフラッフィーがフレダのひざにのってなでるようにとせがみます。フラッフィーをなでているうちに、ひとつの考えがうかびました。「そうだわ」そう言って、フレダは台所へかけて行きました。

「お母さん、わたしコンクールに出したいものがあるの。ねん土買ってちょうだい。ねん土でねこを作るの。」フレダは目をかがやかせて言いました。

「それはいい考えね、フレダ。あしたすぐに買ってあげましょうね。」

次の日の午後、お母さんはねん土を買ってきてフレダに使い方をせつめました。

フレダはつくえの上に新聞紙をしいてさっそく仕事にかかりました。まず、ねん土でだいたいの形を作りました。そしてフラッフィーをよんでひざの上におき、体をなでました。なでてからねん土でそれと同じ形を作ります。そのように同じことをなん度もくり返しました。フラッフィーは、なでられるたびにゴロゴロとどのをならします。

こうして、それからというものの学校から帰って来ると、フレダはすぐ自分のへやに入り、ねん土作りをつづけました。なん日かして、やっとでき上がりました。「ありがとう、いい子でいてくれて。」こう言ってフレダはフラッフィーをだき上げました。それからお母

さんが、クッキーをやくときのように、それをてんびの中へ入れてかたくしてくれました。

「まあ、とってもきれいにできたわ。」てんびからねん土を出しながらお母さんは声をあげました。

「わたしも早く見たいわ。さめるまでまっていられないわ。」フレダがそう言ったあと、ふたりとも顔を見あわせてわらいました。フレダにとってさわることは見ることだったのです。

次の朝、フレダはねん土のねこをていねいにちり紙につつましました。そして学校へ持って行きました。

しんさが始まりました。それぞれのクラスから一等、二等、三等がえらばれました。一等は赤リボン、二等は青リボン、そして三等は白リボンがつけられます。

いよいよフレダのクラスです。フレダにとって、コンクールに出品できたことは、なによりのよろこびでした。

しんさのけっか、フレダのねこが一等になりました。

「これ、ほんとのねこみたいだね。」ひとりの男の子がほめてくれました。「手を出してなでたくなっちゃうね。」

フレダは、にっこりしました。フレダの指先で見たフラッフィーは、みんなの見たフラッフィーと同じだったからです。



ぼくの友だち

ブライアン・ウ

「エルサレムだ。」目の前に^{め まえ ひろ}広がる^{ひろ}、大きな都^{おお みやこ}を見わたしながら、7さいのサムエルは、しずかにつぶやきました。

サムエルは、ペレアの家から、ヨルダン川^{がわ}をこえて、はじめてこの都^{みやこ}にやってきたのです。長くて、つらい旅^{たび}でした。お父さん^{とう}はヨハブ^{しょうにん}といい、商人^{どう}です。そのお父さんに連れられて、サムエルは、はじめてエルサレムにきたのです。

都^{みやこ}に入ることを考えると、サムエルのむねは、高^{たか}なるばかりです。というのは、もうすぐ、過越^{すぎこし}のまつりが始まり、あちらこちらの地方^{はう}から来た人びと^{き ひと}で、都^{みやこ}の中がごったがえすからです。

でも、いちばんの理由^{りゆう}は、イエスさまがいらっしゃるからでした。サムエルは、エルサレムに^く来ると中^{ちゆう}、あちこちで、イエスさまのうわさを聞きました。イエスさまが、きせき^きを行なわれたこと、親切^{しんせつ}でよい人^{よ ひと}になる方法^{ほうほう}を教えられたことなどを聞きました。

サムエルは、イエスさまをとくべつな友だちのように^{かんが}考えていました。サムエルが、ペレアでイエスさまにお会^あいしてから、それほどたっていません。

サムエルは、おねえさんのジェシカといっしょに、イエスさまのお話^{はなし}を聞きに行きました。ほかの子供^{こども}たちといっしょに、イエスさ

る、イエスさま

ウッドフォード



まに近^{ちか}づこうとすると、イエスさまの弟^{でし}子たちにとめられました。お話^{はなし}のじゃまになると思ったからでしょう。

追いはらわれた子^こ供たちのかなしそうなようすをごらんになったイエスさまは、ほほえみながら、近^{ちか}くに来るようと手^てまねきをしました。そして、やさしい声^{こえ}でこう言^いわれました。

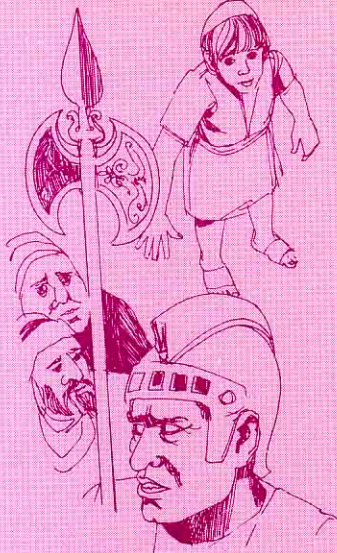
「幼^{おき}な子^こらをそのままにしておきなさい。わたしのところ^{ところ}に来るのをとめてはならない。天^{てん}国^{こく}はこのよう^{もの}な者^{もの}の国^{くに}である。」(マタイ 19:14)

それから、イエスさまは、子^こ供^{ども}たちをだき、頭^{あたま}に手^てをおいて、祝^{しゆく}

福^{ふく}をなさいました。サムエルは、自^じ分^{ぶん}の番^{ばん}が早^{はや}くこないかと思^{おも}いました。やがて、自^じ分^{ぶん}の番^{ばん}になると、イエスさまの力^{ちから}強^{づよ}いうでにだかれしました。そのときのあたたかく、やすらかな気^き持^もちは、ことばで言^いいあられわせません。

今^{いま}でも、イエスさまのあたたかい手^てを思^{おも}い出^だします。イエスさまのあのほほえみ。なんとやさしかったことでしょう。

お父^{とう}さんのラクダ^{ぎやうれつ}の行^{ぎやう}列^{れつ}が、でこぼこ道^{みち}をゆっくりと進^{すす}み、エルサレム^{もん}の門^{もん}をくぐりました。そのとき、サムエルは、「ぼく^{とも}の友^{とも}だちのイエスさまにまた会^あえるかもしれない」と考^{かんが}えていました。



その日は、ラクダから物をおろし、ラクダの世話を^{せわ}をして、一日が^{いちにち}終わりました。なん日も、このよう^ひな日がつづきました。そして、イエスさまをさがす時間^{じかん}ができたのは、金曜日^{きんようび}になってからでした。サムエルは、人^{ひと}と動物^{どうぶつ}でごったがえす中^{なか}を、せまい道^{みち}を通りぬけて、あちこち歩^{ある}きまわり、イエスさまをさがしました。

サムエルが都^{みやこ}の中央^{ちゅうおう}に近づいて行くと、みんなが同じ方向^{ほうこう}に急いでいるではありませんか。一体、何^{なに}ごとだろうか。サムエルは、そう^{おも}思^くって、首^{くび}をのばしました。

道^{みち}のおくの方^{ほう}から、人^{ひと}びとのざわめき^{ごえ}声^{こゑ}が聞こえます。そして、

かぶとの羽根^{はね}かざりと、太陽^{たいよう}の光^{ひかり}にキラリと光^{ひか}るよろい^みが見えます。ローマの兵士^{へいし}です。

サムエルは、おとなの足^{あし}の間^{あいだ}をすりぬけて、兵士^{へいし}の横^{よこ}に出ました。そのしゅんかん、サムエルの心^{しん}ぞうはとまりそうになりました。兵士^{へいし}の手^てにしているたての間^{あいだ}から、重^{おも}い木^きの十字架^{じゅうじか}を背^せおい、頭^{あたま}にいばらの冠^{かんむり}をかぶせられた、サムエルの友だちのイエスさまが見えたからでした。イエスさまは、みんなのわらいものにされ、よろめくたびに、人^{ひと}びとからあざけられました。

「どうしてこんなことになったのだろう。」サムエルのほおを、ゆっくりとなみだ^{つた}が伝^{つた}いました。サムエルは、どうしてよいかわからず、とぼとぼと行列^{ぎょうれつ}について、都^{みやこ}の門^{もん}まで行きました。

兵士^{へいし}たちは、門^{もん}を出ると近^{ちか}くの丘^{おか}にのぼって行きました。そこでサムエルは、むねがはりさけるような光景^{こうけい}を目^めにしました。イエスさまが、十字架^{じゅうじか}にかけられたのです。

なぜこんなおそろしいことが起こったのか、サムエルには、そのわけがわかりませんでした。二日後、ペレアに帰るしたくをしていたときも、かなしみでいっぱいでした。

サムエルが、ラクダの背に荷物をしっかりとくくりつけていたときのことです。「イエス」という声が、サムエルの耳にとびこんできました。

顔をあげると、ふたりの人が話をしていました。なにを話しているのだろう。そう思って、サムエルは、ふたりに近づきました。

「きょうは、三日目だな。」ひとりが言いました。「自分は神の子だと言っていたイエスが、死からよみがえると言った日だ。」

神の子！死からよみがえる！そのことばは、サムエルの心を強くうちました。「ほんとうだろうか。」

ほんとうであるようにという思いが強くなり、サムエルは、近くの馬小屋に行きました。そして、ひざまずいて、「イエスさまが、どうかほんとうに生きていますよう

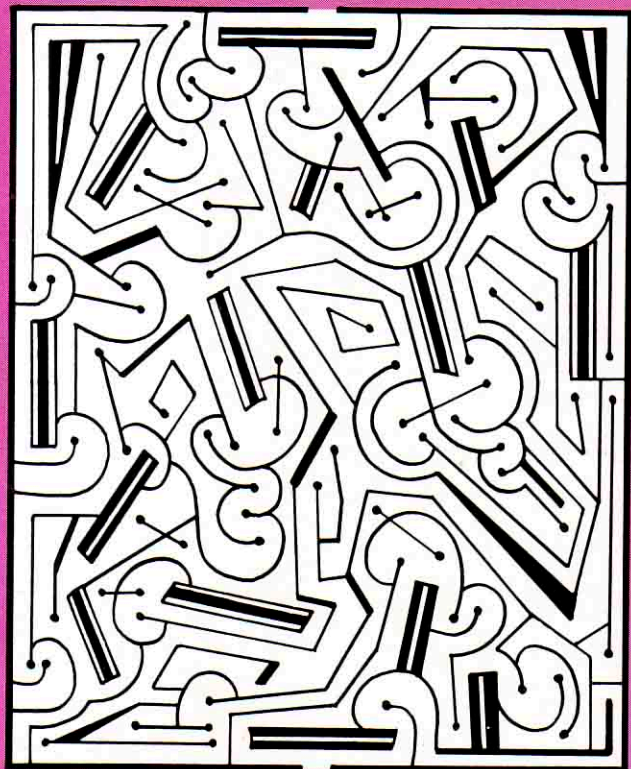


に」といのりしました。

いのりを終わって立ちあがると、心がやすらかでした。それから、サムエルは外に出ました。

明るい太陽の光を見たとき、サムエルは、イエスさまが生きていることを、はっきりとかんじました。「イエスさまは、神の子で、よみがえられた。そして、いつまでも、ぼくの友だちなんだ。ほんとうに！」

入 口



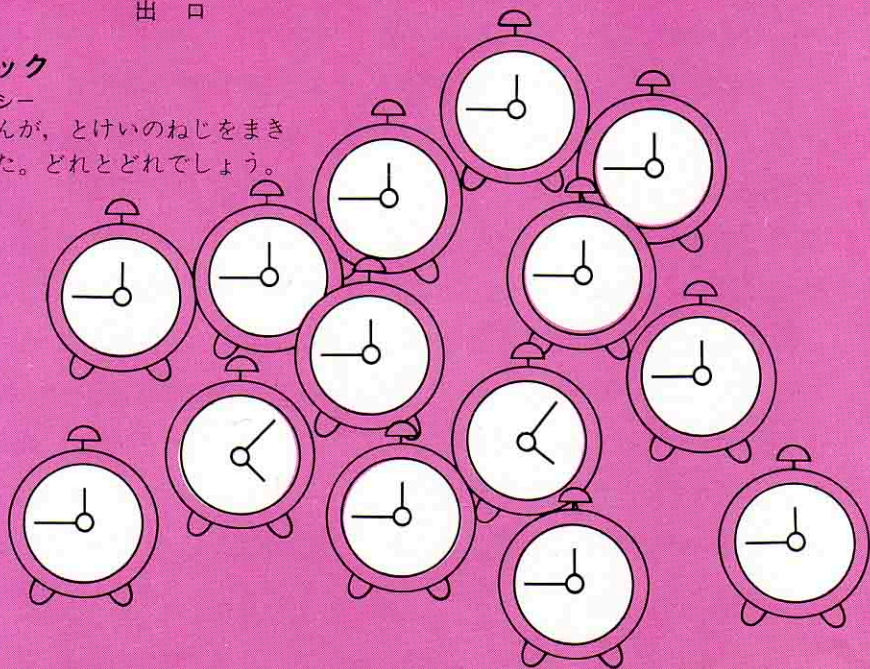
出 口

おもちゃばこ

チックタック

アン・ステイシー

とけいやさんが、とけいのねじをまき
わすれました。どれとどれでしょう。



リチャーズ姉妹、 ソルトレーク・シティーで逝去さる

1977年12月31日、十二使徒評議員会会員リグランド・リチャーズ長老の妻、イナ・ジェイン・アシュトン・リチャーズ姉妹（91歳）が、ソルトレーク・シティーの病院で静かに息をひきとった。

生前、リチャーズ姉妹は、教会の数々の責任を献身的に果たしながら、妻として、オランダやアメリカ南部諸州の伝道部長など数多くの責任に召された夫リチャーズ長老に同伴して、世界各地を訪れた。

エドワード・Tとコーラ・リンゼイ・アシュトンの娘として生まれたリチャーズ姉妹は、1909年5月19日にリチャーズ長老とソルトレーク神殿で結婚した。そして、その司式を行なったのはリチャーズ長老の父であった。

姉妹は、2男4女に恵まれ、この世を去る前に28人の孫と83人のひまご、さらにやしやごひとりの顔を見ることができた。

なお、告別式と埋葬は1978年1月4日にソルトレーク・シティーで執り行なわれた。



ハワイ神殿、5月に一般公開

ハワイのオアフ島ライエに所在するハワイ神殿が、来る5月、4週間にわたって一般公開される予定である。この神殿の一般公開は、1919年11月27日に、ヒーバー・J・グラント大管長によって献堂されて以来初めてのことである。

大管長会は、5月2日から27日まで、日曜日を除く毎日、改修工事を終えたハワイ神殿を一般の参観者に公開することを発表した。

その後、神殿はもう一度献堂され、一般の人の立入りは禁じられることになる。

この内部の改築ならびに増築工事は、一昨年(1976年)6月以降進められてきたものであるが、これによって増加の一途にある神殿儀式を容易に行なうことができるようになる。また、60年の歳月を経てきた建物を現在の建築基準にかなったものに改築し、合わせて大幅な整備が行なわれることになる。



「わたしの民が 大ぜいいる」

日本東京ステーク支部
国立支部
元専任宣教師
宇田川精一郎

私たち伊勢で働く4人の宣教師が、佐藤伝道部長の突然の訪問を受けたのは、私がそこに着任して間もない(1976年)5月24日のことでした。伝道部長は宣教師を集めて労をねぎらい、いつもと変わらない穏やかな口調で話しはじめました。

「みなさんは良くがんばっていますね。しかし、支部を開いてももうすぐ一年になります。が、まだバプテスマが一人もありません。そこで、もしこれから1ヵ月の間にバプテスマがなければ、この支部を閉めて、みなさんは名古屋に移ってもらいます。名古屋ではもっと多くの宣教師が必要です。」

私は驚きのあまり何も話すことができませんでした。伝道部長の言われている通りだったのです。伊勢市に宣教師の支部が開かれ、伝道が始められてからすでに9ヵ月経っていました。これまでに多くの人々がモルモン経を読み、宣教師のレッスンに耳を傾けてきましたが、バプテスマを受けるだけの強い信仰と証を得た人はまだ一人もいませんでした。しかし、宣教師が引き上げるということは、伊

勢市に住む10万人以上の人々から福音を聞く機会を取り去ってしまうことになります。まして現在教えている30人以上の求道者はどうなるのでしょうか。

「およそ、怠惰なる者はその地位に居るに値せず、またその義務を覚らず信任さるに足る行いを示さざる者は、その地位にある値なき者なり。」(教義と聖約107:100)

次第にこの聖句が、私の心に重くのしかかって来ました。伝道部長が帰られたあと、私はたまたらずにひざまずき、これまでの自分の怠惰や高慢が神様のみ業の発展を妨げていたことを深く悔い、赦しを求め、最後になるかもしれない伊勢での1ヵ月間の伝道に全力を注ぐ決意をしました。

その日から私たちは、祈るたびに必ずバプテスマについての導きを求めました。朝起きた時、福音の勉強を始める時、朝食の時、伝道に出かける時など、ありとあらゆる機会に、バプテスマを施すことができるように神様の導きを求めたのです。時には、断食をして求道者にチャレンジしました。

半月はあつと言う間に過ぎてしまいました。その間、福音を喜んで受け入れた少年が両親の大反対にあって、バプテスマのチャレンジをしていた家族から次々と集会の約束の断わりを受けたりで、求道者は減る一方でした。しかもバプテスマの予定はまだありませんでした。主を代表して福音を伝える宣教師として今までになく強い責任を感じていた私は、決してあきらめてはいませんでした。焦りとわずかながら失望を感じはじめていました。「どうして断食と祈りが答えられないのだろう。これほど熱心に祈っているのに、なぜ……」聖書を開いた私の目に答えが示されたのは、その時でした。

「恐れるな。語りつづけよ、黙っているな。あなたには、わたしがついてる。だれもあなたを襲って、危害を加えるようなことはない。この町には、わたしの民が大ぜいいる。」(使徒18:9-10)

「……語りつづけよ……わたしがついてる……わたしの民が大ぜいいる……」何度も心の中で繰り返しながら、込み上げてくる熱いものを抑えることができませんでした。「そうだ、必ず福音を聞く人がこの伊勢市にいる。」机の前に張った聖句を読むたびに確信が湧いてくるのを感じました。

それから数日後、約束の集会がなくなった私たちは、近くの、まだ伝道したことのないアパートに行きました。同僚がドアを叩くと、30歳前後の男の人が出て来ました。はじめは、見知らぬふたりの突然の訪問にとまどっている様子でしたが、私たちの目的を話すと快く集会の約束に応じてくれました。最初の集会で「心の支えになるものが欲しいと考えてい

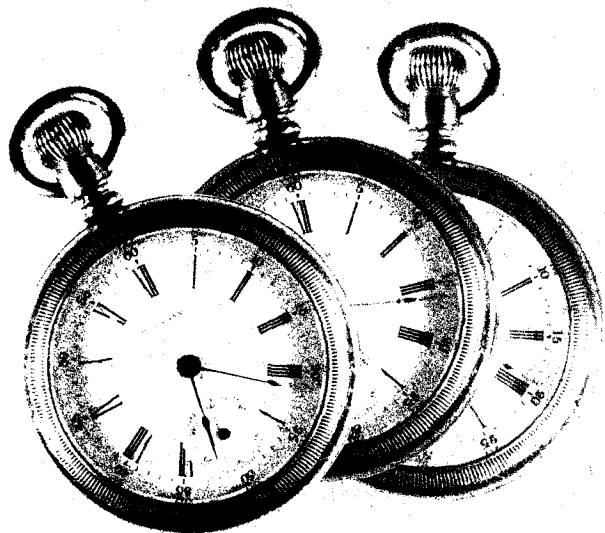
ました」と自分の心境を語るその人は、新しい生き方、福音を求めている神様の子供でした。「この人はバプテスマを受ける人だ。」そう感じた私たちは、毎晩のように訪問して、必要な証と知識が得られるように一生懸命に教えました。やがてその人は、すべての改宗者が経験するように、新しく生まれ変わることに喜びと希望が、恐れと不安に打ち勝ち、ついにバプテスマを受ける決心をしました。初めて会ってから14日目、面接を無事に終え、伊勢市で最初のバプテスマが行なわれることになりました。

朝5時半、五十鈴川の上流に集まった宣教師と会員たちは、まわりを木立ちに囲まれた、人影もなく静かな場所を選びました。雨があがって、初夏のさわやかな朝風の中、バプテスマを見守る私たちは澄んだせせらぎと時おり聞こえるうぐいすの声に一層静けさを感じました。自然の中でバプテスマを受けた兄弟と、この会に集った一人一人が強いみたまの力を感じ、心は穏やかな喜びで満たされました。この兄弟に会うことができたことへの感謝と喜びは、言葉で言い尽くすことはできません。

「伊勢支部は続けましょう。」伝道部長のメッセージを受けた時、私は、伊勢支部にとって歴史的な最初のバプテスマが、伝道部長の訪問を受けてから丁度1ヵ月後の6月25日の早朝であったことに気づいたのでした。

「人もし必ず受くると信じ、信仰堅固にキリストの御名によりて願わば、何にてもこれを受くべし。」(イノス 15)

イエス・キリストの御名によって証します。アーメン。



それだから、
あなたがたも
完全な者となりなさい

ブレンダ・ハント

聖 餐式の沈黙が続く中、若い監督はゆっくりと説教壇に向かい、そしてこう言った。「皆さんの中で主を愛していらっしゃる方は、ちょっと手を挙げていただけますか。」

この言葉に答えてみんなは手を挙げた。高く挙げている人もいれば、低く挙げている人もいる。中には指だけしか挙げていない人もある。手をひざに置いたままの人はほんのわずかである。監督はうなずいて言った。「どうもありがとうございます。ところで、完全な日を過ごしたいと思っていらっしゃる方は手を挙げて下さい。」

また、みんなは手を挙げた。

「ラリー、完全な日を過ごしたいのですね。私のところへ来てくれませんか。ジーンとラリー。ディアン。ショーン。テスとジョン。リンとマイグ。」

ゆっくりと、心を込めて、短い間をとりながら、次々に名前を呼んだ。しだいに下がる手もあり、ついにはひざに戻る手もあった。最後まで高く挙げていたのは、ほんのわずかであった。

「未亡人の方はいかがですか。完全な日を過ごしたいと思われる未亡人の方はいませんか。」しばらく沈黙が続いた。監督は、会衆を見回した。中には、かなりの人数の未亡人と老人がいる。「ビビアン、あなたは完全な日を過ごしたいと思いませんか。」

それから、監督は、振り返って、壇上に来た人々に言った。「では、いつを完全な日としましょうか。火曜日がいいですか。」

動揺ととまどいと困惑の表情があった。実際に完全な日を過ごすことになるとは、だれひとり夢にも思っていなかったからである。火曜日という監督の申し出にうなずく人もいた。しかし、じっとしている人もいた。しばらくして、だれかが「木曜日はどうでしょうか。まだ日があるし、準備する時間もとれますから」と提案した。そこで、木曜日がその日と決められた。

監督はまばたきをしながら言った。「それで結構です。木曜日には皆さんは完全な日を過ごすわけです。そして、今度の日曜日には、自分の完全な日がどんな日だったか、聖餐会

でお話していただきましょう。」

それから監督は会衆の方を振り返って言った。「ほかに、完全な日を過ごしてみたいという方はいませんか。」アロン神権の若い教師であるジェームズが、そばかすだらけの顔で、愛さようのある笑いをふりまきながら手を挙げた。彼も仲間に加えられた。

監督は続けて会衆に語りかけた。「木曜日には、この11人は完全な日を過ごします。ワード部の会員として皆さんの責任は、この人々がその割り当てを全うすることができるよう祈ることです。」

何をすれば完全な日にできるだろうか。どのように過ごしたら完全な日になるのだろうか。その週の中間、ワード部の会員が集まるたびに、その完全な日のことが話題に上った。その結果を聞くことを、みんな楽しみにしていた。

そして、ついに日曜日がやって来た。

ビビアンは未亡人である。いつも茶色の髪を短くまとめている、目がぱっちりとした背の高い婦人である。彼女は普段の集会では静かに座っているだけである。やや内気で、とても人前では、自分の心の思いを言い表わせない人であった。彼女は、完全な日を始めるにあたってまず神殿に入り、次に、これまでしようと思いつきながらものびのびにしてきたことを少しすることにしていた。しかし、何から何まで予定した通りに事が運んだわけではない。その日起きると、ひどい頭痛に襲われた。3年半振りのひどい頭痛であった。そのため、新しくその日の計画を立て直さなければならなくなってしまった。

彼女の家には、母親の古い文書や記録が箱詰めされてあった。そこで彼女はその箱を

引っ張り出すと、母親の生涯についての切り抜き帳を、数時間かけて整理し直してみようと思いついた。「私は、それを自分ひとりでしようとは思いませんでした。妹に電話して、これからそちらへ出かけるからと言いました。途中で私はビニールの整理用カバーシートを何枚か買って行きました。」こうして、彼女と妹と一緒に、母親の生涯の物語を、写真と文とで編集し直した。その作業は計画していた数時間では終わらなかった。こうしてついに、なつかしい思い出に満ちた切り抜き帳ができ上がった。

その完全な日に行なったことで、彼女に新しい道が開かれた。「私の祝福文には、家族の系図の仕事をこなすようにと書かれてありました。でも私は系図のことはわかりませんでしたし、別に興味もありませんでした。けれども、母の記録を整理したあと、私は夫の記録も整理することにしました。とても楽しい仕事でした。今では、私の夫と息子と娘の記録の資料を集め終わりました。これまで何年間もためておいた貴重品や形見や記念品の詰まった古い箱を皆整理すると、大勢の先祖のために神殿の儀式ができるたくさんの方の資料が見つかったのです。私の仕事は今始まったばかりです。とても幸せです。」

彼女は生活に新しい目的を持ち、本当に幸福そうである。

ショーンは15歳になる活発な子で、楽しいユーモアのセンスに富んだ愉快な少年である。しかし彼は、完全な日を過ごすというチャレンジを真剣に受けとめた。彼には、聖典の勉強がまだ日課と言えるほど生活の一部になっていなかった。そこで、完全な日には、特に聖典を読むようにしようと思った。「その日に

聖典を読むことがどうしてそれほど大切なことだったのか、ぼくにはわかりません。けれども、とにかく大切であったことは確かです。水曜日の夜には、何度も目が覚めました。寝過ぎたのじゃないかと思ったからです。そして、目覚しが6時に鳴ると、ぼくはほんの少しの間、横になっていただけですぐに起きあがり、聖典を手に取りました。そして、45分ほど聖典を読んでから、学校へ行く支度をしました。聖典を読んだことで、その日一日の調子が整ったような気がしました。

学校の友達や先生や家族とうまくやっていることは、いつだってそんなに簡単ではありません。完全な日も例外ではありませんでした。やはり、時々大変でした。間違いも少しはしました。でも、いつもの日よりかはるかに立派に過ごせました。

聖典を読んで、もうひとつぼくの助けになったことは、自分の受けている祝福や、自分のしなければならないこと、そして自分の過ちにたくさん気づいたことです。その日、一日中、もっと完全になるために何ができるだろうかと考え続けました。」

「もっと完全な者となるためには、何ができるだろうか」ということを、その日、多くの人々が自問していた。多くの人々のこの問いに対する答えは、マタイ25：40の聖句である。「あなたがたによく言うておく。わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである。」

ジェームズもそれに気づいたひとりであった。彼はよく人助けをする。しかし、一番都合の悪い時機に人助けを求められることが時々ある。「あなたのお母さんはあなたに、大好きなテレビ番組を見ている時や、本の一番お

もしろいところを読んでいる時に、決まって、手伝ってちょうだいと言われるでしょう。どうして勉強している時に、ゴミバケツを外へ出してちょうだいって頼んでくれないんでしょうか。」

木曜日の彼の目標は、頼まれた仕事を何でもする、しかも機嫌よくするということであった。「そのことを忘れないでいるということも、大変な仕事でした。時々、自分で立ち止まって、『すぐにやるんだよ』と言い聞かせなければなりませんでした。でも、その日の終わり頃には、すぐに応じられるようになってきました。それはぼくをとってもよい気分にしてくれました。」

ジョンとテスは、隣人をできるだけ大勢訪問することにした。それを一週間続けることにしたのである。

ジョンはこう語った。「監督からその割り当てを受けるとすぐに、私たちは家へ帰って、そのことについて話し合いました。計画を立て、祈り、それからまた計画を立て、祈りました。」

テスは次のように語った。「日曜日から木曜日までは、その日が段々近づいてくるということばかり考えていました。私は準備の時間は充分あるので木曜日には、自分にできる最良の生活をしようと考えていたのです。言い逃れはできないと思いました。」

ふたりは、一日中隣人を訪ね、病気の人には果物など何かお見舞いを持って行き、これまでふたりをいろいろと助けてくれた人々には感謝の気持ちを伝えることにした。ワード部のフェローシップ委員会で働いているジョンは次のように言っている。「実に多くの人々が孤独で、だれかと話したいと思っているん

です。そこで私たちは、出かけて行って、私たちが関心を持っているということを知ってもらおうと思ったのです。その結果、彼らは私たちに心を開いてくれました。本当に素晴らしいことです。ある姉妹から、集会に行けないので、時々大祭司の兄弟たちが家に来て聖餐式をしてもらえないだろうか、と尋ねられました。そこでそのことを監督に話し、翌週には、私たちふたりがその姉妹のために聖餐式を行ないました。」

ふたりの一日は成功だっただろうか。テストに尋ねてみよう。「もちろんですよ。普段の日でも、自分は何をしなければならないか考えます。ただ実際に行おうと努力をしていないだけです。だから、行なえば、気持ちが一掃しますよ。」

ディアンは、友人に感謝を示すだけでなく、家族にも感謝することが大切であると考えた。「電話の用件は、ただ、あなたを愛してって伝えなかっただけなの」と、その日彼女は弟ふたりと妹に言った。その日の出来事を思い出して笑うたびに、彼女のひとみは輝き、金髪が揺れた。「弟はまるで信用しませんでした。何度も何度も『一体、どうしたの』と私に尋ねるのです。」

私は、完全な日を過ごすには、自分自身の生活を評価してみることが必要なことを知りました。そして、私は評価し直してみても、自分がいかに多くの祝福を受けているかを改めて知ったのです。すると、感謝の気持ちがますます強くなってきました。こうして私は、自分が家族にどれほど感謝しなければならないかわかったのです。

私があの電話をしてから、弟はもう二度も電話をくれました。特に用があったわけでは

ありません。ただ私が元気であるかどうかを確認するためなのです。実家を出てからもう何年にもなりますが、その間、そのようなことはただの一度もありませんでした。」

マイクとリンは結婚後間もないが、ふたりの子供に恵まれていた。彼らは特にこの日を子供たちと一緒に過ごし、家族全員のために特別な日にしたいと思った。そのため、その日は家族を挙げて、いつもよりお互いに優しく接するよう一生懸命に心掛けた。その日、みんなで峽谷へ出かけ、家族同士互いに知り合い、天父について深く学んだのである。マイクは次のように言っている。「完全な日を過ごすようにすれば、家族生活を改善できないなどということは決してありません。素晴らしい一日でした。」

リンはたまたま、このほかにも貴重な経験をした。「私はその日朝早く起きて、おいしい朝食を準備することにしていました。まず、パンケーキから取り掛かりました。泡立て器でパンケーキの材料をかきまぜていた時です。多分、ちょっと勢いよくし過ぎたのでしょう。突然、バターがあたり一面に飛び散ってしまいました。食器棚、床、私の体、みなバターだらけです。それから、息子を見ると、顔中パンケーキのバターのしみだらけで、鳩が豆鉄砲を食らったような目をしています。私はそれを見て、笑い出してしまいました。いつもの私なら、そんなことになったら、すぐくいら立っただけです。」

それから、朝食のすぐあとで、母から電話がかかって来ました。妹を仕事先まで車で送ってもらえないかと言うのです。私は子供たちに服を着せ、車のエンジンを暖めると、子供を連れて母の家まで運転して行きました。

ところが、母の家に着くと、妹はもう一か所行く所ができたの、と言います。でも、ここでも、私は事態をすんなり受けとめることができ、怒ったり、気分を悪くしたりすることはありませんでした。

私は母の家から帰る途中、泣き出してしまいました。息子はどうしたのかと尋ねます。私は、『私たちは、今日、完全な日を過ごすのよね』としか言えませんでした。』

次はジーンの話である。「完全な日を過ごすために、前もってよく計画し、心の準備をするということは、とても大切なことです。しかも必ずできるんです。私もやはり、その日のことはいつも気にかかっていたが、ただ、その日が来ないで欲しいとずっと願っていました。それまで、完全な一日を過ごしてみるなどということは、夢にも思ったことはありませんでした。そんなことを考えるのが、ちょっと恐ろしかったんですね。

私の完全な日は、6割方成功といったところでしょうか。いつもより、少しは良く過ごせました。少なくとも、やってみなければいけないという意識はあったからです。でも、私は本当の意味で心の備えはできていませんでした。だから、この日にしたいと思っていたような一日にはなりませんでした。』

その日のためにどのような準備をすればよいのだろうか。「自分の生活の中で、本当に主を身近に感じたのは、家族と一緒に祈る時と、聖典を勉強する時です。私は、完全な日には、気持ちの集中ができなくなっていました。ちょうど、これまで何年間も頭の中に詰めておいた雑多な事柄が、その日に一度に表面に出てしまったみたいです。私は、良い一日を、また完全な一日を過ごすために心の準備をし

ていませんでした。完全な生活をするという試みは、私の場合、失敗でした。それはただ、私が心の準備のために時間をとらなかったからです。しかし、それでも、私の人生には大きな影響がありました。それ以前には、完全な日を過ごしてみるなどということは考えてもみなかったのですが、今では、たびたび考えます。そして、いつかそのような日を過ごしてみるつもりです。』

ラレイはジーンの妻であり、10代の子供ふたりの母親である。いつもの彼女は、一日の終わりにとはとても疲れてしまうのであるが、完全な日には、まだまだ元気であった。その上、したいと思っていたことを数多くやり遂げることができたのである。「それに、その日を完全なものにしようとすることによって、私は、いろいろなことが自分のくせになっていることに気づきました。例えば、私は、大したことの無い理由で、意味もなく、突然ジーンに腹を立てることがよくありました。自分のくせになっていたんですね。今は、それを直そうと頑張っています。』

自分の欠点に気づき、徐々にそれを正すということ、大なり小なりみんなが経験した。ラリーは、伝道中に「完全な週」の運動に参加したこともあり、また完全な日の試みに参加した経験もあった。「多くの帰還宣教師と同様、私も、聖典の勉強をなおざりにするようになっていました。いつも、何かほかにすることがたくさんあるような気がしていたからです。そこで、監督からこの割り当てを受けた時、伝道中に感じたように、もう一度主を身近に感じなければならぬと思いました。

しかし、事は計画した程うまく運んではくれませんでした。その日の夕方には、それま

で痛んでいた親知らずを抜いてもらう羽目になりました。でも、私は、その日が失敗だったとは感じていません。私は、どんな事態が起きようとも、完全な生活をしようと一生懸命に心掛けていたのです。いつもと変わらない事柄についても、自分を高めようと努めました。私は、非常に重要なことをその日にいくつか学び直したのです。」

監督は、一体どのような動機から、ワード部の会員たちにあのような要求をしたのだろうか。

「私は、完全な一日を過ごすということをずっと考えてきました。でも、私たちは、普通の日には、外部から様々な影響や圧力を受け、霊的なことや理想的なことに目を向けることがほとんどできない状態です。そして、私たちは、完全な一日を過ごしたり、完全な生涯をおくったりすることはできないとよく口に出して言います。しかし、私は、自分が証を述べている間に、会員たちがそれを試みる時は今だという強い気持ちを感じたのです。

約束の日には、大勢の会員が完全な生活をしようと努めました。中には、特に割り当てを受けなかったにもかかわらず、参加してくれた会員さえいました。私が神殿推薦状発行のための面接をして以来度々、多くの人々が完全についてどう考えているか話してくれます。あの日のことは、このワード部の多くの会員の生活に多大の影響を与えています。」

この経験により、ワード部の会員の心はまとまった。ワード部の会員として私たちは、その結果にはなはだ関心を持ったのである。監督が語ったように、私たち会員の責任は割り当てを受けた人々のために祈ることであった。そして事実私たちはそのようにした。私

は、自分がこれまでになく会員一人一人に関心を払っていることに気がついた。そして、会員たちは希望と熱意と関心とをもった真実の民となったのである。

私自身の生活は、以前より豊かで充実したものとなった。自分を完全な者にするというチャレンジをこれまでに増して意識するようになった。そして、最近では、常に主のみたまにとどまっていただけのようなことをしている自分に気づいたのである。ワード部の会員の多くも同じことを感じていた。

私たち教会員は、目標は完全な者になることであると、絶えず言い聞かされている。この試みに参加した人々の行なったことを見て、興味深いことは、彼らが、これまでないがしろにしてきたことを行なったり、害のあることをやめたりする必要性を感じたということである。言葉を換えれば、私たちは、日常生活の中で、完全な者になるためにどうしてもしなければならないことをしないでいることがしばしばであるということである。祈り、聖典の勉強、奉仕、家族の絆を強めることなどがそれである。もうひとつ興味深いことは、どんなに慎重に計画しても、予期しないこと、例えば、ひどい風邪や歯痛やそのほか不都合なことが起こったということである。しかし、これとても、忍耐力や強い自制心を養う絶好の機会となったのである。

この試みに参加した人々や見守っていた人人の生活に、劇的な変化が起こったわけではない。しかし、私たちは目を覚まされ、成長した。そして、今なお成長し続けている。

フィクション

庭の花のブーケ

ジャック・ウェイランド



彼女は若く美しかった。しかし、世の汚れを全く知らず、清らかな人生を送った彼女は、17歳を迎えた3ヵ月後に、めったにない病気で生涯を閉じたのであった。

その彼女に、ひとつ年上の友達がいた。けれども、ふたりはデートをしたことはなかった。彼女が若すぎて真剣に恋を考える対象ではなかったのである。

ふたりはモンタナ州の小さな町に住んでいた。東は大草原で、西には山々が連なっていた。

このふたり、デイクとキャシーの通っていた高校では、末日聖徒が少数であったため、早朝セミナーが行なわれていた。デイクは毎朝5時に目覚し時計の音でベッドからはね起き、シャワーを浴びて服に着替え、大急ぎで朝食をすませると、車でキャシーを迎えに行った。キャシーはよく彼を待たせ、片手に本とバッグとトースト、もう一方の手にヘアブラシと上衣をつかんで飛び出して来るのだった。

4月のある夕方、キャシーの母からデイクに電話があった。「キャシーは明日、学校をお休みするわ。ですからセミナーのお迎えもけっこうです。ちょっと具合が悪いの。」

それが発端だった。

デイクは5月に高等学校を卒業し、6月には長老に聖任され、伝道費用を貯めるために衣料品店で働き始めた。そして、店が引けると、毎日キャシーを見舞った。彼女は気分の良い日には庭に出ていることもあった。

その裏庭は以前は一面芝生であったが、ここ数年間は菜園が幅をきかせて、今ではテラスの前に少しの芝生が残るだけになっていた。キャシーの母親は野菜に押されて芝がすっか

り姿を消すかと気が気でなく、片すみに残る花畑を後生大事にしていた。

デイクがキャシーを見舞ったその日、キャシーは芝生に寝転がってはおづえを突き、忙しそうに花畑を飛びまわる蜜蜂を一心に見つめていた。デイクは門のところで立ち止まり、そんな彼女を黙って見ていた。キャシーはジーンズをはき、ウエスタン風のシャツを着ていた。先日見舞ってから髪を切ったのだろう。夏らしいショートカットに変わっていた。

やがてデイクが門を入ると、キャシーは振り向いて起き上がった。

「一日中、花を見ていられるなんていいねえ」とデイクが冷やかすと、キャシーは立ち上がってデイクの方に歩いてきた。

「だれに切ってもらったの？」

「母よ、この髪どう？」

「すてきだよ。」

ふたりは肩を並べて、大根やレタスやトマトの植わった長いうねを見て歩いた。

「きのうの夜デートしたの？」

「うん、カレンとね。ミニゴルフをしたんだ。」

「彼女のこと、好き？」

「さあ、どうかな。彼女はいい人だけど、でも、ぼくはあと4ヵ月で伝道に出るつもりだから、何とも言えないよ。多分手紙はくれると思うけどね。」

デイクは家の格子にまきついている枝から小さな花を摘んでキャシーにあげた。

「君も手紙くれる？」

「まあ、どうでしょう。ファンクラブでも結成させようっていうつもり？『親愛なるデイク長老、あなたは実に素晴らしいお方です。私たち女性はあなたがお戻りになるまで、日

日を嘆きつつ過ごしております。』いかが？」

「うん、そうそう。」デイクはにやっと笑って言った。「それでばくはみんなにガリ刷りの手紙を出すんだ。『親愛なる友よ、先週は500人のバプテスマがありました。私はあなた方が愛して下さる謙遜なこの自分を見失うまいと努めております。願わくは、皆さんがどなたも私の留守中デートをなさいませんように。』」

「それ、ほんと？」

「いやあ、冗談だよ。」デイクが答えた。

キャシーは急に真顔になって言った。「あなたはきっと良い宣教師になれるわよね。救い主のことを忘れないで、立派な僕になれるわね。」

「うん、なりたと思うよ。」

ふたりはテラスの椅子に腰かけた。

キャシーが言った。「今朝ね、ここにすわって庭の花を見ていたの。その時、救い主がおっしゃったことを思い出したわ。『野の花がどうして育っているか、考えてみるがよい』って。聖書のどこだったかしら。」

「確か、セミナーの卒業の時に聖句捜しでやってるはずなんだけど、どこだったかな？」

「いいの、あなたを困らせるつもりなんかないの。答えてくれなくてもいいわ。私ね、考えながら、心の中にその時の情景を描いてみたのよ。そのことを話したいの。」

キャシーはデイクが摘んだ花を両手で持ってじっと見つめた。

「朝早くなの。」キャシーは話し始めた。「ガリラヤ湖にはまだ霧がかかっていて、ひとりの人が小さな漁村から小道をこちらへ向かって歩いて来るの。その人、救い主なのよ。湖から続いている坂道をこちらに登っていらっ

しやるの。途中で花が咲いている野原に出ると、救い主はかがんで花をじいっとご覧になる。そして手を伸ばして花びらにそっと触れて、かがみこむようにして花の中を見つめていらっしやるの。私、考えるのはね、救い主が何を見ていらっしやるかということ。」

「花だろう。」

「それだけ？花だけかしら？」

「ほかに何が見えたの？」

「イエス様は天のお父様からこの地球を創造する責任を与えられたわけでしょう。前にはその花のいろんな部分の役目をよく知っていらっしやったはずよ。そんな細かいことを思い出していらっしやったのかしら。それとも、とっても賢い御方だから、ただ観察するだけで花の部分の働きが理解できたのかしら。わからないことって、そのことなの。」

「ばく、わからないなあ。」

「ええ、私もわからないわ。でもね、イエス様はどんなものでも、当たり前だとは思っていらっしやらなかったと思うの。夕日や、ガリラヤ湖の景色のひとつひとつ、晴れていても雨が降っていても、それぞれの美しさを大切に考えていらっしやったと思うのよ。イエス様は美しさに敏感な方だったと、私、思うわ。野の花がどうして育っているか、イエス様は、私たちが見るよりもずっとずっと細かくその花のことを考えていらっしやったと思うわ。」

仕事から帰ったキャシーの父親が、庭に出て雑草を抜き始めた。物静かな彼は、整然とした野菜畑を誇りにしていた。働きながら、何の歌ともつかぬ口笛を吹くのがあった。

彼はうねのいちごを5,6個摘み取ると、水道の水で洗い、デイクとキャシーに持って来た。

「どうだ、おいしいだろう。」

6月に、キャシーは遠い町の大学の医療センターへ1週間ほど検査を受けに出かけた。帰宅後もいっこうに良くなった気配がなく、専門医の診断を両親に聞いてみても妙にはぐらかすだけだった。

夏が過ぎると、デイブの目にもキャシーが少しずつ弱っていることがわかった。彼が訪ねた時にベッドに就いていることが多くなった。疲れやすく、デイブの見舞いが数分に限られることもあった。しかしキャシーはデイブの訪問を喜び、気分の良い日には話もした。

キャシーはある日こう言った。「デイブ、私、あなたに贈る伝道の聖句を決めたわよ。」そしてベッドのわきの机に載っている合本に手を伸ばし、その箇所を開いて読んだ。『「この故に、汝ら神の役務に出で立たんとする者は、終りの日に臨みて神の前に咎なくして立たんため、すべからく心をつくし、勢力をつくし、思をつくし、体力をつくして神の役務をなせ。」（教義と聖約4：2）そうでしょう？」

「何としてでもぼくを立派な宣教師にしたっていうんだね、君は。」デイブは言った。

「しなくちゃいけないことはたくさんあるわ。生きていてお手伝いしたいなあ。」

デイブは顔を上げ、キャシーを見つめた。

「私、知ってるのよ。もうじき死ぬの。」

「そんなことあるもんか。」

「遠い病院まで見てもらいに行っただの。2日して帰ってきたけれど、お父さんもお母さんもその結果のことは何も言わないのよ。これからだって話してくれないでしょう。今はね、お父さんがカリフォルニアへ遊びに行こうって言うてるの。自分の生命保険を下ろしてみんなで飛行機で行こうって。今までそん

な旅行はしたことがないのに。お父さんやお母さんは私の部屋に来ると、決まってとても明るく振る舞うの。でもきのう、お母さんが自分の部屋にこもって泣いているのを聞いちゃった。一番悲しいのは、そのことについて話せないってということなの。まるで救命いかにしがみつきたいに、ただお天気の話ばかり、20分もしていたのよ。」

その時、母親が花瓶を持って部屋に入ってきた。キャシーの寝室は友だちから贈られた花や鉢植えであふれていた。彼女は古くなった花の花瓶をふたつ持って、部屋を出て行った。

キャシーは話を続けた。「デイブ、私、あなたに話したいの。だって、お父さんやお母さんには話せないもの。心の中をだれかに聞いてもらって、すっきりしたいの。自分の不安を自分でしっかり見つめたいの。そうしないと、不安が広がるばかりなの。」

ふたりは長い時間語り合った。自分の将来を直視しようと懸命なキャシーの話を、デイブはただ聞いていた。

「だれも命は保証されない。天のお父様は私からどんな祝福も取り上げたりなさらない。そのことはわかるわ。でも、私、この地上にいたい。ここにいたい。」

デイブが帰ろうとすると、キャシーは彼にこう頼んだ。「神権の祝福をしてほしいの。」

「お父さんのすることだろう？」

「お父さんから祝福してもらったわ。でも、しっかりとこれから先のことを見つめてゆけるように、そして両親と話せるように、神権の祝福をしてほしいの。」

「監督に来てもらったら。」デイブは気弱に言った。

「ううん、あなただって神権を受けているわ。あなたに祝福してほしいの。」

「神権の祝福なんて一度もしたことがないんだよ。」

「きょうでなくてもかまわないの。」キャシーが言った。

「君のお父さんや監督にそのことを言ってもいいかな。祝福してもいいって言われたら、喜んでするよ。」

日曜日の午後に、彼は準備をしてやってきた。2日間聖典を読み、キャシーの父親と監督にそのことを話して助言と協力を求めた。しかし、彼らからキャシーの頼みを引き受けるように励まされて来たのだった。デイブは土曜日の朝から断食して祈っていた。

彼がドアを開けると、すでにキャシーは椅子に腰かけて待っていた。

デイブはキャシーのうしろに立った。部屋は静まり返り、戸外の音が開かれた窓から聞こえる。デイブはつややかなキャシーの髪に両手をそっとのせると、目を閉じ、やや間をおいてから祝福を始めた。「キャサリン・エドモンズ、メルケゼデク神権の権能によって私はあなたの頭に手を置き、あなたに神権の祝福を授けます。……」言葉は自然にすらすらと口から出た。彼は、キャシーに慰めがあるように、病状について両親と腹藏なく話し合えるようにと祝福した。

祝福が終わると、デイブもキャシーも平安を感じた。デイブはキャシーをベッドに寝かせ、自分は椅子に腰かけて彼女の手を取り、寝入るまで話をした。

月曜日の午後にデイブが再びキャシーを訪れると、彼女は外で椅子に腰かけていた。父親が傍らで、キャシーが外に出やすいように

テラスに屋根と囲いをつけていた。

「お父さん、お部屋の鉢植、ここに移していいかしら。ほかの花と一緒に庭に植えてあげたいの。」

父親は答えた。「かまわないよ。部屋に置くのはあきたのかい。」

「ううん、ここに置いてお日様にあててあげたいだけ。」

翌日デイブが来た時には、部屋の鉢植が庭に移っていた。

「お花、元気そうでしょ。」キャシーがデイブに言った。「一日中見ていたのよ。蜂が飛んで来たわ。外だとお日様も暖かい土もあるわ。ほんとによかった。家の中に閉じ込めておいたらかわいそうよね。」

デイブは土曜日の午前中だけ仕事に出て、午後はキャシーの家に行くために休みを取った。ふたりは囲いをめぐらしたテラスに肩を並べてすわった。

夕方になると、朝から西の空をおおっていた黒雲が急に広がってきた。

父親がやさしく言った。「家の中に入らないか？ 雨になりそうだよ。」

「ううん、ここでいいわ。雨が見たい。」

夏の嵐が激しく襲って来た。風に吹かれて大粒の雨が真横からたたきつけた。

ひょうも降って来た。初めはおはじきの大きさでひとつふたつとガラスにあたってはじけ飛んでいたが、嵐が近づいて来るにつれて、緑の繊維ガラスでできたテラスの屋根は機関銃をあびせられたようなすさまじい音をたてた。

その嵐も数分のうちに静まった。芝生はひょうで一面向真っ白だった。

父親が庭へ出て行った。小雨に濡れながら

黙って被害を見回っていたが、トマトの折れた茎を地面にぽいと捨てた。次に重い足取りで花畑に向かった。花は無残にも地面にたたきつけられていた。

「鉢植を外に移すんじゃなかったねえ。」父親は言った。「部屋に置けばかわいそうなこともなかっただろうに。」

するとキャシーは立ち上がり、ふらつく足を踏みしめながら父親のそばに行った。

「いいえ、お父さん、庭に置いてよかったのよ。お部屋にいたら無事だったわ。でも、外に出してあげて、たった1日か2日だけど暖かなお日様や蜂や、夜は夏の涼しい風にあたったわ。外に出して悪かったなんて、私、思わない。庭に出られて、それで充分だった

と思う。……どんなに短い間だって。」

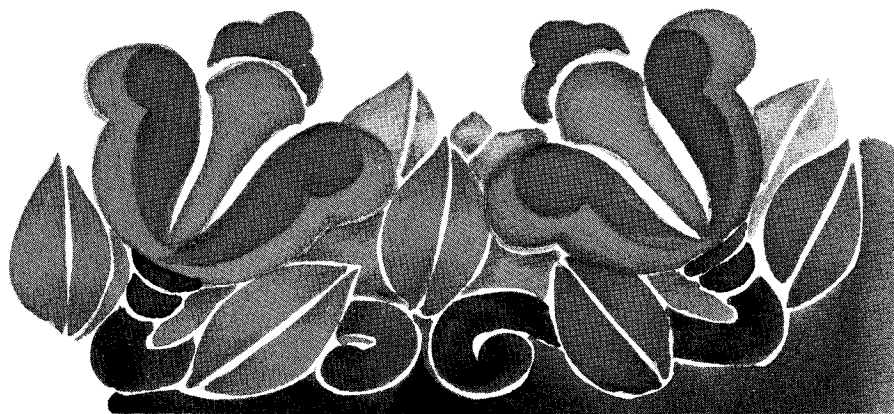
父も娘も、花を越えてもっと別の話をしていっていると感じていた。「お父さん、私、大丈夫よ。」静かにそう繰り返すキャシーの肩を、父親はしっかりと抱いた。

翌日、彼女はデイクに、やっと両親と自分の将来のことについて話せたと言った。

それから半月後、キャシーは入院した。

そして3週間して、彼女は死んだ。

葬儀に列席した人の中には、柩の上に、花輪でなく、ブーケが置かれているのを不思議に思った人がいたに違いない。庭で摘んだ花のブーケ、それもひょうに打たれながらも生き抜いたあの花のブーケが。



教会の若人たちにとって最も大切な責任は、自分自身を改宗することである。この意味で、私たちは全員、教会に改宗しなければならない。福音は真実であるという確信を得なければならない。そうする時に、この真理を他の人々に分かちことができるのである。

救い主と弟子たちがピリポ・カイザリヤの地方へ向かっておられたその途中で休憩された時のことである。救い主は弟子たちにこう

問われた。「人々は人の子をだれと言っているか。」彼らは言った。「ある人々はバプテスマのヨハネだと言っています。しかし、ほかの人たちは、エリヤだと言い、また、エレミヤあるいは預言者のひとりだ、と言っている者もあります。」

そこでイエスは弟子たちに彼ら自身の証を述べるように求められた。「それでは、あなたがたはわたしをだれと言うか。」

頭では知らないことを 心が教えてくれる時

ハロルド・B・リー



私は弟子たちみんなが証したと思う。しかし記録されているのはペテロの言葉だけである。「あなたこそ、生ける神の子キリストです。」

すると救い主はそれに答えてこう言われた。「バルヨナ・シモン、あなたはさいわいである。あなたにこの事をあらわしたのは、血肉ではなく、天にいますわたしの父である。」(マタイ16:13-17)

ペテロはこの時すでに啓示を受けていた。彼はイエスがキリストであり、世の救い主、神の聖なる御子であると知っていた。ところが、それから1年経つか経たないかのうちに、救い主から叱責されている。何が理由でシモン・ペテロがとがめられたかわからないが、救い主はこのように言っておられる。

「シモン、シモン、見よ、サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って許された。しかし、わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った。それで、あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい。」(ルカ22:31-32)ここで主は、ペテロがまだ真に改宗していないということを暗に告げておられる。同時に主は、あなたが今持っている証もあなたの明日の証ではないと言っておられるのである。証は太陽の輝きのように光を増し加えてゆくこともあれば、あなた次第で光を失い、闇になることもある。

キリストの教会員に課せられた最大の責任は、真の改宗をすること。そしてそれと同様に大切なのが、改宗した状態を保ち続けることである。では、改宗とは何であろうか。

人は自分の目で見るときものを見た時、耳で聞くときものを聞いた時、心で知るときことを知った時、改宗をする。その見るべきも

の、聞くべきもの、知るときものとは真理である。永遠の真理である。そしてそれを実践すること、それが改宗である。しかし、何らかの理由で真理を見ず、聞かず、知らず、実生活でその真理に従わない時に、人は自分の信仰を失う。彼は自分の行動によって証を失うのである。

数年前にある有名な大学教授が教会に入った。私がニューヨークの実業家たちの前で、彼に末日聖徒イエス・キリスト教会に加入したいきさつを話すようお願いした時、彼は人々にこう語った。「この教会に入ったわけをお話しましょう。頭では知らなかったことを心が教えてくれたからです。主のみたまが私に告げているということを知り、この福音が真実だと知ったのです。」頭で知る以上のことを心で理解する時、私たちは主のみたまが自分に働きかけていることを知るのである。

主は証を持つ人々に向かって言われた。「されば、汝らの光が輝きて世の中を照らすために、汝らの光を高くかけよ。汝らが高くかくる光とは、すなわちわれなり。とりもなおさず汝らが見るわが行いなり。」(Ⅲニーファイ18:24)

必要なすべての人に導きを下さるのは救い主である。

私たちはみな、世の万人を照らすキリストの光を受けてこの世に生まれた。私たちが神の戒めを守るかぎり、キリストの光は、私たちを奮起させ、私たちに警告と導きを絶えず与える。そして私たちは証を持った時に、ペテロが論されたように、それを人々のために用いることが求められるのである。「あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい。」

だれでも人々を力づける機会は山ほどある。

自分の兄弟や姉妹、自分の友だち、隣人や親しい知人、あるいは自分の両親。

私はアルバータ神殿の神殿長からこのような話を聞いたことがある。

「若い人々がグループで死者のバプテスマを受けるため、神殿に来ました。バプテスマのセッションを2回か3回受け終えて家に帰ろうとしていた時、私は彼らを自分の部屋に招いて、何か質問があったら答えましょうと言いました。そして私は彼らにバプテスマのことに話しました。『バプテスマを受けてから聖霊を受けよと言われましたが、それはあなたがふさわしければ聖霊が導き、祝福を与えて下さるということなんです。だれかから敵対されたり、ひどい目にあわされたりした時にも、聖霊の力によってそれを克服できるのですよ』と。

そう言って少年少女たちを見回すと、ひとりの少女がうれしそうに涙を流していました。彼女はこう言いました。『私はバプテスマを受けた時、母からさんざんに言われました。外出しようとするといつものしられます。神殿に行くと言った時も、神様を汚すようなことを言ってもう自分の娘ではないと怒鳴られました。それで断食をして、神殿の中で導きを受けて母の態度にくじけない力をいただけるようにと思ってここに来たんです。でもだめかと思いました。けれども今、本当に最後になって、あなたからその鍵をいただいたのです。』その少女は明るくほほえんで言いました。『私がいただいている聖霊の影響力を母に伝えるようにします』と。」

それから神殿長はこう続けた。「何週間か過ぎて、その少女から手紙が来ました。こういう手紙でした。『帰宅して玄関を入ると、出かけた時と同じように母は汚ない言葉をかけて来ました。

前でしたらすぐに言い返したのですが、その時は母のところに近寄って肩に腕をまわして、「お母さん、きょうは口論したくないわ。ソファに座りましょう。お母さんに話したいことがあるの」と言いました。私のこの言葉に母は驚きました。ソファに並んで座ると、みたまが本当に私から母に伝わっていくようで、私たちふたりは寄り添い、私は自分の証を述べました。神殿でどんなに素晴らしい経験をしてきたかを話しました。すると驚いたことに、母は涙を浮かべ、私に謝ったのです。』

少女の手紙の最後は、『今、母は教会員になるためのバプテスマを受ける準備をしています』と書かれていました。』

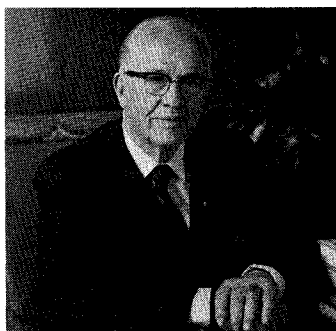
「あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」と救い主は言われた。私はこれをあなた方に申し上げたい。なぜなら、これは救い主のみ言葉だからである。私たちの第一の責任は、自分自身を改宗することである。それから人を改宗させるのである。

今は一人一人が自分の足で立つべき時である。立ち直りなさい。改宗しなさい。だれも借りものの光では耐えられないからである。あなたは自分自身の内にある光によって導かれなければならない。自分に光がない時は、自分の足では立てないのである。

願わくは主の祝福により、あなた方が義のよろいを身にまとい、これから先にたとえどのような試練に見舞われようとも、それにたくましく立ち向かって行けるように。

(ハロルド・B・リー大管長 1971年この記事を執筆当時、第一副管長兼十二使徒評議員会会長の職にあった。1972年7月、ジョセフ・フィールディング・スミス大管長を継いで教会の大管長となり、1973年12月26日に死去した。)

主のみ業を妨げることがあってはならない



十二使徒評議員会会長
エズラ・タフト・ベンソン

ある教会員の個人的な行動が問題となっている場合、管理人の職という原則に目を向ける必要がある。王国が発展すると、それに応じて責任を委任し、管理人の職を分かち合わなければならなくなる。そして人は、それこそ十人十色、与えられた管理人の職にいろいろな気持ちで携わる。神は非常に忍耐強い御方であり、長く耐え忍ぶ御方である。それゆえ、私たちの中には、その責任にふさわしい者となるまで、神にずっと待っていただいている者もいる。通常、神は非常に長いロープと長い時とを人に与えて下さっている。そして人はそのロープをたぐって神のみ前に近づくか、それともどこか途中で手を離してしまうか、どちらかである。確かに神は忍耐強い御方である。けれども、管理人の職にある者は、弱々しい力ではあっても、久しく主のみ業を妨げることがあってはならないのである。「天網恢々疎にして漏らさず」ということわざがあるが、神のみ業を怠る者には遅かれ早かれ必ず報いが下される。

神は人に自由意志を与えて下さったが、いつの世でも、それを誤って用いる人間がいる。福音の網は善い者も悪い者も；そして最善の者も最悪の者も引き込む。ここで言う最悪の者とは、最後の清めの時を前にして、悪魔が王国の破壊を企てて王国の中にその部下を送り込んだために起こった者のことである。現在、王国の内部にその部下の一部がいる。しかし、しかるべき時が来れば、その正体は明らかにされるであろう。時はやがてあらゆることを解決に導き、善い者を引き上げ、悪い者を振り落とす。もし王国の内部で問題を引き起こすような事態が生じたら、まず、その問題が自分の管理の職の範囲内にあるかどうかを見極めなければならない。それから、関係する人に話をする。もしその問題がもっと高い権能を持つ人の意見を必要とするような性質のものであれば、その時は、思いやりのある態度をもって人知れずに、必要な手続きを踏めば良い。

教会の指導者との見解の相違を公にすることは、分派、抗争を生み、確実に背教の道をたどることになる。私たちのなすべきことは、王国で忠実に暮らすことであって、キリストからたまわったこの大いなる教会に対して人に不満を抱かせたり、熱意を失わせたりすることではない。

教会は真実である。従って、その律法を守り、集会に出席し、指導者を支持し、召しに応え、推薦状を受け、祝福を享受していただきたい。

